

2024(令和6)年度 国文学研究資料館 展示

松野文庫の贈りもの

千載和歌集卷之廿
恋哥一
堀川院清時
心紙より
新波江のふりかへ
白くみん
わさやまのふりかへ



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature



ギニョール
フランス リヨンの人形劇場の楽屋にて



園遊会（赤坂御苑）出席のとき（2007年4月）



愛犬加賀と

*写真はいずれも松野陽一編『花桃抄 追想の松野栄利子』（笠間書院制作、非売品、2010年）より転載

ごあいさつ

ようこそ、「松野文庫の贈りもの」展へ。

このたび、国文学研究資料館が所蔵する松野陽一文庫の古典籍類を取り上げて、国文学研究資料館展示室において特別展示を開催する運びとなりました。

松野陽一文庫は、国文学研究資料館の元館長で、中世近世和歌の研究者であった松野陽一（一九三五～二〇一八）が長い年月をかけて丹精込めて蒐集したコレクション（全四八五点）です。一部に漢籍や朝鮮本、明治本、複製などを含みますが、大半は江戸末までの日本古典籍であり、その中核は歌書、とりわけ『千載和歌集』の古写本と『古来風躰抄』などの藤原俊成関連書、ならびに石野広通ら江戸堂上派の歌人たちと松平定信ら楽翁文化圏の人びとの関係書で構成されます。西川祐信を中心とする絵本や、人情本、合巻がややまとまって収蔵されていることも興味深いことです。

このたびの展示では、松野陽一文庫の全貌と特色を知っていただくために、全体を四部に分かって紹介します。皆さまには、展示された古典籍類のさまざまな表情を楽しんでいただくとともに、これらを蒐集した研究者松野陽一の思いや信念にも心を寄せていただければ幸いです。

本展示は、国文学研究資料館の共同研究「国文学研究資料館松野陽一文庫の基礎的研究」（代表館野文昭埼玉大学准教授）の研究成果を反映しています。展示開催にあたり格別のお力添えを賜った御令息松野一秀さま、御後援いただいた立川市、多摩信用金庫、立川商工会議所、立飛ホールディングスの関係者各位に、心より感謝と御礼を申し上げます。

ほかならぬ国文学研究資料館の展示室でこの展示会が開催できるのは、わたくしどもにとってこの上ない慶びです。秋の一日、皆さまの御観覧をお待ちしています。

二〇二四（令和六）年九月五日

国文学研究資料館長
渡部 泰明

目次

松野陽一略年譜	5
松野陽一主要編著書目録	6
松野陽一文庫の概要	7
第一部 藤原俊成とその周辺	8
【コラムA】 俊成と万葉集	9
【コラムB】 俊成と和歌の道	10
第二部 江戸の武家歌壇	28
【コラムC】 石野広通	30
第三部 絵本の楽しみ	40
第四部 コレクションの広がり	46
【コラムD】 松野陽一著『書影手帖しばしとてこそ』	47
出品リスト	62

凡例

- 一、本冊子は、国文学研究資料館展示室（東京都立川市）において、二〇二四年九月五日（木）から一〇月二二日（火）まで開催する特別展「松野陽一の贈りもの」の展示リーフレットである。
- 二、作品の解説は簡潔を旨として、平易な記述を心掛けた。
- 三、執筆者による推定事項には「～」を付し、改行は「／」で、漢数字はイチゼロ方式で示し、文字は通行の字体に従った。
- 四、執筆は、国文学研究資料館特定研究（課題）「国文学研究資料館松野陽一文庫の基礎的研究」のメンバーがこれに当たり、館野文昭・川上 一・神作研一・福澤徹三、そして人間文化研究機構人文知コミュニティ（国文学研究資料館特任助教）河田翔子の五名が全体を整理するなど編集責任を務めた。編集に際しては、佐藤崇国文研総務課課長補佐の格別のお力添えを忝くしたことも明記する。
- 五、作品解説のうち、明版と朝鮮本は堀川貴司慶應義塾大学附属研究所斯道文庫長に、連歌寄合書断簡は小川剛生慶應義塾大学文学部教授に、人情本と合巻は木越俊介国文学研究資料館教授に、それぞれ特別寄稿していただいた。
- 六、展示は、河田翔子を中心として、川上と神作、国文研社会連携係が協力してこれに当たった。

国文学研究資料館特定研究（課題） 国文学研究資料館松野陽一文庫の基礎的研究 （二〇二二―二四年度）

《研究代表者》館野 文昭（埼玉大学准教授）

- 小野寺拓也（神田女学園中学校高等学校教諭）
甲斐 温子（静岡大学専任講師）
柿沼 紅衣（慶應義塾大学大学院生）
加藤 弓枝（名古屋大学准教授）
加藤 弓枝（名古屋大学准教授）
川上 一（国文学研究資料館助教）
神作 研一（国文学研究資料館副館長）
高橋 諒（天理大学附属天理図書館司書研究員）
西山 美香（早稲田大学非常勤講師）
福澤 徹三（すみだ郷土文化資料館学芸員）
渡部 泰明（国文学研究資料館長）

松野陽一略年譜

※本年譜は、田淵句美子作成の「松野陽一略年譜」（浅田徹ほか編『和歌史の中世から近世へ』所収、花鳥社、二〇二〇年）を参照して作成した。

西暦（和暦）	事 績
一九三五年（昭和一〇）	一月一日 東京都千代田区（当時は東京市神田区）に生まれる
一九五五年（昭和三〇）	三月 東京都立九段高等学校卒業
一九五九年（昭和三四）	三月 早稲田大学第一文学部国文学科卒業（指導教授 岩津資雄）＊卒業論文は『六百番歌合』を扱う
	四月 早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻修士課程入学
一九六一年（昭和三六）	三月 同大学院文学研究科日本文学専攻修士課程修了 ＊修士論文は『千載和歌集』を扱う
	四月 同大学院文学研究科日本文学専攻博士課程進学
一九六四年（昭和三九）	四月 立正女子大学短期大学部専任講師に就任
一九六七年（昭和四二）	四月 立正女子大学短期大学部助教授に昇任
一九七〇年（昭和四五）	三月 早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程満期退学
一九七二年（昭和四七）	四月 立正女子大学短期大学部教授に昇任
一九七四年（昭和四九）	一月 『藤原俊成の研究』により文学博士（早稲田大学）の学位を取得
	三月 立正女子大学短期大学部退職
	四月 東北大学教養部助教授に就任

西暦（和暦）	事 績
一九七六年（昭和五一）	四月 東北大学教養部教授に昇任
一九七九年（昭和五四）	四月 東北大学大学院文学研究科担当 （一九八七年三月まで断続的に担当）
一九八八年（昭和六三）	四月 国文学研究資料館文献資料部教授に併任 （九月まで）
	一〇月 同館文献資料部教授に転任
一九九一年（平成三）	四月 同館文献資料部長（一九九四年九月まで）
一九九四年（平成六）	六月 同館企画調整官（副館長）に就任 （一九九七年三月まで）
一九九五年（平成七）	四月 東北大学名誉教授
一九九七年（平成九）	四月 第四代国文学研究資料館長に就任 （八年間在任）
二〇〇三年（平成一五）	四月 総合研究大学院大学教授併任 （二〇〇五年三月まで）
二〇〇五年（平成一七）	三月 国文学研究資料館長を退職
	四月 国文学研究資料館長名誉教授
二〇一五年（平成二七）	四月 瑞宝中綬章を受章
二〇一八年（平成三〇）	十一月二十五日 逝去（八三歳）

（小野寺・川上）

松野陽一主要編著書目録

※本目録は、浅田徹作成の「松野陽一業績目録」（浅田徹ほか編『和歌史の中世から近世へ』所収、花鳥社、二〇二〇年）を参照して作成した。なお、*以下にコメントを添えた。

『古今・新古今』（明解シリーズ5、有朋堂、一九六八年）

*井上宗雄との共著。

『千載和歌集』（笠間叢書17、笠間書院、一九六九年）

*久保田淳との共著。底本は静嘉堂文庫所蔵の伝冷泉為秀筆本。

『藤原俊成の研究』（笠間書院、一九七三年）

*藤原俊成の著作と伝記資料に関する実証的な研究書。本書により、

翌一九七四年に早稲田大学より「文学博士」を授与された。

『江戸堂上派歌人資料 習古庵亨弁著作集』（新典社叢書1、新典社、一九八〇年）

*亨弁に関する基礎研究。

『江戸堂上派歌人資料 連阿著作集』（新典社叢書2、新典社、一九八一年）

*連阿に関する基礎研究。

『霞関集』（古典文庫430、古典文庫、一九八二年）

*石野広通撰の私撰集の翻印。底本は寛政一二年再撰本（松野蔵）。『霞関集作者目録』（松野蔵）を付す。

『谷山茂著作集二 藤原俊成 人と作品』（角川書店、一九八二年）

*「俊成年譜」の補注を担当。

『向南集』（古典文庫487、古典文庫、一九八七年）

*北村季文撰の私撰集の翻印。底本は東北大学附属図書館狩野文庫蔵

の嘉永三年写本。

『詞花和歌集』（和泉古典叢書7、和泉書院、一九八八年）

*底本は陽明文庫蔵本。

『千載和歌集』（新日本古典文学大系10、岩波書店、一九九三年）

*片野達郎との共著。底本は龍門文庫蔵本。

『千載集 勅撰和歌集はどう編まれたか』（セミナー原典を読む3、平凡社、一九九四年）

*国文研におけるセミナーでの講義録に基づく入門書。

『鳥帚 千載集時代和歌の研究』（風間書房、一九九五年）

*平安末期の定数歌や千載集時代和歌史の諸問題を追究。

『近世歌文集 上』（新日本古典文学大系67、岩波書店、一九九六年）

*上野洋三との共著。『霞関集』以下、都合一点の江戸武家関係歌書

を校注。解説「近世和歌史と江戸武家歌壇」を執筆。

『書影手帖 しぼしとてこそ』（笠間書院、二〇〇四年）

*古典籍（書物）と人に関する滋味深いエッセイ集。

『千載和歌集 新後拾遺和歌集（西南院本）』（冷泉家時雨亭叢書77、朝日新聞社、二〇〇六年）

*『千載和歌集』の「解題」を担当。

『藤原俊成全歌集』（笠間書院、二〇〇七年）

*吉田薫との共編。

『花桃抄 追想の松野栄利子』（笠間書院制作、非売品、二〇一〇年）

*御令室松野栄利子一周忌に編まれた追悼文集。

『千載集前後』（笠間書院、二〇一二年）

*『千載和歌集』に関する論考を収載。松野蔵の『千載和歌集』とその

関連資料の紹介と解題も載せる。

『東都武家雅文壇考』（臨川書店、二〇一二年）

*江戸堂上派武家雅文壇に関する基礎研究。

（柿沼・川上）

松野陽一文庫の概要

国文学研究資料館所蔵の松野陽一文庫は全四八五点(文庫番号は「16」と「54」)。ここにその概要を紹介します。

蔵書の核をなすのは歌書であり、最も注目すべきは千載和歌集のコレクションです。写本と版本を合わせると実に二二点(二十一代集や八代集所収のものを除く)。コレクション中最古の室町前期の写しと目される大島雅太郎旧蔵本や、「架蔵本中最善本」(松野陽一『千載集前後』二一八頁)という江戸前期の写本(存巻下、列帖装)、伝蜷川親元筆本、伝曼殊院慈運筆本、伝松崎俊章筆本、小汀利得旧蔵本、西本願寺旧蔵本等々、圧巻です。古写本に混じって版本が都合七点見出されるのも興味深く、珍な「千載和歌集かるた」もあります。藤原俊成関連では、「歌苑抄」断簡、内藤風虎・加藤磯足旧蔵の古来風躰抄、松浦静山旧蔵の長秋詠藻、反町弘文荘本の別雷社「歌合」も挙げておきましょう。

ついで歌書の中で注目すべきは、亨弁や石野広通ら江戸堂上派の歌人たち、そして松平定信や堀田正敦ら楽翁文化圏の人びとの書目がまともって見出されることです。亨弁は再治視聴筆削と和歌童翫抄の二種。石野広通関係は、鶏鳴霞関集、霞関集、延年観再点連歌、絵空言など都合七点に及びます。楽翁文化圏の関係書目は、堀川後度百首三吟、水月詠藻、賢歌愚評、行之記など全部で一二点。また、和歌渚の松、〈江都〉諏訪台八景詩歌、飛鳥山十二景詩歌并碑など、江戸の地の私撰集も三点確認されます。〔近世歌人和歌短冊〕六〇有余枚の中には、石野広通・萩原宗固・畑中盛雄・成島和鼎・北村季文のほか、松野の師岩津資雄(一九〇二〜九二)の短冊も含まれています。

なお歌書を拾います。〔連歌寄合書〕断簡、〔未詳私撰集〕断簡、松浦静山旧蔵の〔褌子内親王家歌合等歌合七種〕と〔住吉社歌合等歌合四

種〕、賀茂季鷹旧蔵の前大納言実国卿集、入江昌喜書写の隆信集、中野康章旧蔵の源三位頼政集、秋末一郎旧蔵の和歌用心私説、伝本極稀の「小町花あはせ」などなど。

詳説古文真宝大全などの朝鮮本や、高野版の常楽会法則、浜口博章旧蔵の伝嵯峨本〔源氏物語〕(花宴巻)、仏書には厭願口譚、念仏歌仙集などもあります。

西川祐信及び祐信風の絵本がまともって収蔵されていることも特記せねばなりません。その数占めて三六点(往来物や艶本等もあり)。さらに、中島丹次郎画の絵本心の種、高木貞武画の画本和歌浦、西川左京の絵本富士の錦、長谷川光信画の絵本鎧歌仙など、伝本稀なる絵本も目立ちます。人情本(八点)と合巻(一四四)が存することも添記します。

如上、松野陽一文庫は、御自身が長い年月をかけて丹精込めて蒐集された〈研究者のコレクション〉です。右に挙げた書目の大半を展示していますので、どうぞ御覧下さい。なお、松野陽一文庫は全点、国文研の「国書データベース」にて画像を公開しています。(神作)

(参考) 海野圭介・小川剛生・落合博志・神作研一編「国文学研究資料館所蔵松野陽一文庫分類目録」(浅田徹ほか編「和歌史の中世から近世へ」所収、花鳥社、二〇二〇年)。



第一部

藤原俊成とその周辺

松野陽一先生の学問

私

の研究の出発点は、藤原俊成の和歌の考察でした。初めての学会発表も俊成の和歌。不出来な発表で、先達からは散々とつちめられました。だからでしょうか、初対面の松野陽一先生——指導教員ではありませんが、先生以外の呼び方ができません——は、休み時間に丁寧な批評とともに、励ましてくださいました。何を教わったかは思い出せませんが、「あなたの発表を聞くために、仙台から上京してきたのですよ」という言葉は今でも忘れられません。先生の著書『藤原俊成の研究』とひたすら格闘していた日々が、報われた気がしました。その後折に触れて激励していただきました。

『藤原俊成の研究』は、一九七三年に笠間書院から刊行された、先生の最初の研究書です。俊成の創作活動と批評活動の、およそあらゆる文献と伝記の資料に検討を加えています。その「あとがき」には、こうあります。「藤原俊成の基礎的資料に関する研究」とでもすべきところをあえてこの書名としたのは、「単なる非文芸的部分を切り離れた研究としてしまいたくない」という願望をこめた」からだ。反芻したい言葉です。

松野先生の研究には、ほかに『鳥帚千載集時代和歌の研究』にまとめられた諸論や、『東都武家雅文壇考』に結実する江戸時代の和歌の業績など多数ありますが、いずれにしても、先生の学問は一つの事実もゆるがせにしない、厳しく徹底したものでした。しかし、その厳しさに自己満足せず、作品や思想に結実するものを見定めようとする眼を、生涯手放されませんでした。ありきたりの実証主義者とは異なる、そういう懐の深さが、先生の学問の魅力の源泉になっていると痛感します。生来のお人柄だけのことはありません。仕事という実践の場で鍛えられてこそ、人格は品性へと磨かれる。国文学研究資料館長であられた先生の責務を、時を隔てて引き継ぐことになり、荣誉とともに身震いするほどの緊張を覚えています。

(渡部 わたなべ)

【コラムA】

俊成と万葉集

ここにち、『万葉集』を勅撰和歌集と考える人はいません。しかし、かつては勅撰と考えられ、どの天皇の勅撰かという問題は歌人たちの関心を集めていました。俊成の『万時』(『万葉集時代考』とも)は、俊成が藤原良経(一一六九―一二〇六)に宛てた手紙(消息)で、良経の問いに答える形で、『万葉集』の成立時代について見解を述べています。『万時』の成立は建久四年(一一九三)前後、ちょうど良経の歌壇活動が本格化した時期であり、特に建久四年は『六百番歌合』を主催した年でもありました。時に俊成は七九歳、良経は二五歳。手紙には、顕昭説を中心に問題点をまとめた上で、『万葉集』の内部徴証に基づく見解が述べられます。俊成は、結局記録がないのでどの天皇の勅撰かはわからないが、奈良時代の孝謙天皇の御代に編纂されたとするのが妥当であろうと先行する論に比して、大変慎重な態度を示します。

一般に『万時』は、俊成の万葉論としての側面が注目されますが、本来は良経個人に宛てた手紙でした。手紙は次のように続きます。「やすやすと人の知りたることにては候はぬ也」「知らぬ事をも知りがほに、見定めぬことをも、事をきるやうに申あひて候へば、聞きにくくも又おこがましくも候なり」。確かな記録や証拠のないことを知り顔に語ることが愚かだという趣旨です。松野がその著書『藤原俊成の研究』で指摘するように、これは九条家が歌壇を舞台とした顕昭との対立、すなわち俊成から顕昭への批判と見るべきところです。他方、若い良経に対し、根拠に基づき考へ、その上で「分らない」という立場を取るべき時もあると記すこの手紙からは、後進を見守る師としての立場も垣間見えるように思われます。

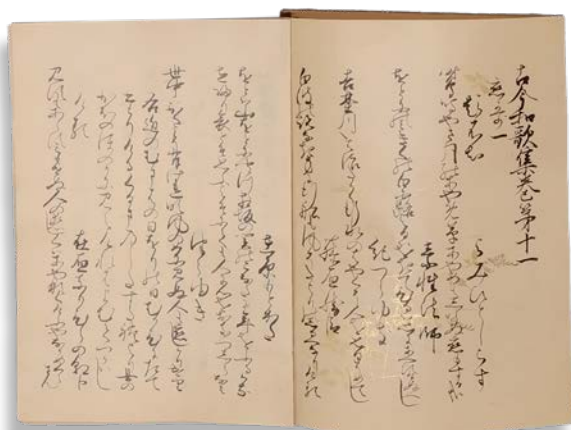
(甲斐)

俊成と和歌の道

藤原俊成が撰者せんじやを務め、自ら執筆した『千載和歌集』せんざいわかしゅう 仮名序は、その歌論を窺うことのできる資料でもあります。そこには「敷島の道」「歌の道」「和歌浦の道」ほか（これだけではありません）、「道」という語が繰り返し用いられていることに気づきます。彼は和歌という文芸を「道」と認識していたのです。和歌が「道」であるということは、外れてはいけない規範を持つものであり、古より今に至るまで連綿と続く歴史性を有しており、そしてそれを次代以降の世に伝えるべき文芸である、という意味合いが含まれていると言えます。院政期はそういうものとして和歌を捉える考え方が浸透しつつある時代でしたが、俊成は特に自覚的でした。

まさにそうした意識に基づいて、古代から（俊成にとつての）現在に至るまでの和歌の表現様式の史的展開と本質について論じたのが、代表的歌論書『古来風躰抄』です。その序文において、俊成は天台宗の重要仏典である『摩訶止観』まかしかんを引用した上で和歌の道の歴史を仏法相伝ぶつぽうそうでんの次第に擬なぞらえています。また、本来は狂言綺語きよぎよとして仏教では否定されるべき和歌を、むしろそれをもって仏法を讃嘆さんたんし、仏縁ぶつえんを結ぶための具ぐとしていう思想も語られています。既に彼が出家者だったこともあるのでしょう。和歌の道の重要性を主張するために、既に重んずべき「道」とされていた仏道の權威を借りているとも言えますが、俊成にとつての和歌の道は、仏道と同一視し得るような「道」だったことがわかります。『千載和歌集』は、仏教に関する和歌を収める「釈教」部しやくきょうを独立した部立として設け、それに一卷を充てた初めての勅撰集として知られています。それも右に述べた俊成の歌道観と密接に関わっているものと言えるでしょう。

（館野）



1 | 1

〔八代集〕

はちだいしゅう

「八代集」とは、『古今和歌集』から『新古今和歌集』までの八つの勅撰和歌集の総称で、和歌の世界では特に重視されました。本書は、列帖装綴子表紙、金泥の下絵や金銀の箔を散らした料紙を用いた美麗な写本で、調度品としての価値をも備えます。印刷文化が発達してもなお、丁寧に写され美しく調製された本には独自の価値と需要がありました。

(甲斐)

煌びやかな調度品



古今和歌集卷第一

春奇上

わさけにくさけの目よめん

在原九方

年のしもくまのけりてをさすやまじこもえ
春さけの目よめん

紀男之

袖ひてむしひ水のまじりてさるる今ものせやめ

題三下

よみ人三下

春夜まじりてはにみりの吉野の山雪くやけ

二條の石れもあのもれれ御云

雪のうらもくまのけりてをさすやまじこもえ

題三下

よみ人三下

梅のうらもくまのけりてをさすやまじこもえ

雪の本もくまのけりてをさすやまじこもえ

よみ人三下

春のうらもくまのけりてをさすやまじこもえ

題三下

よみ人三下

1
|
2

古今和歌集

和歌界の聖書

『古今和歌集』は、平安前期に編纂された最初の勅撰和歌集です。醍醐天皇の命によって編纂され、延喜五年(九〇五)に奏上されました。現存する写本の多くは、俊成の息定家によって校訂された本文(定家本)の系統であり、本書もそれに列なる一本です。特徴のある定家の書風は、後代「定家様」と呼ばれ、子孫の冷泉家を中心多くの歌人によって尊重追従されました。本書もその定家様を用いて書写されており、歌道における定家の影響力の大きさを窺わせます。

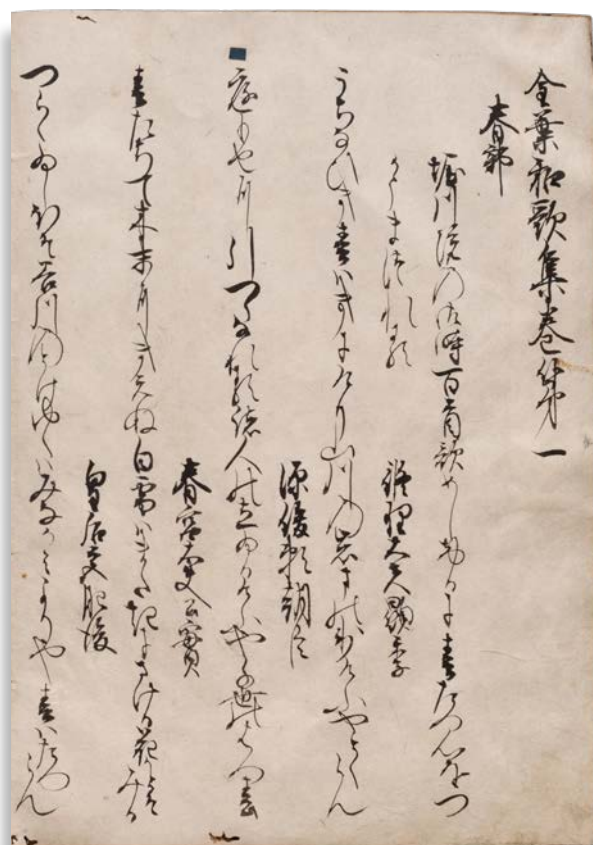
(高橋)

1 3 金葉和歌集

平安後期に編纂された五番目の勅撰和歌集です。みなものとしより源俊賴奉勅撰。全一〇巻。(1-4)『千載和歌集』とともに「八代集」と記された箱に納められています。二代畠山牛庵はたけやまぎゅうあん(一二二五〜九三)の極札を付属し、江戸前期の公家松崎俊章筆と伝えます。俊章は坊城俊完ぼうちょうとしかた(一二〇九〜六二)の次男。同時期の書写とみてよいでしょう。『金葉集』の本文は、その成立事情から大きく三段階に分かれています。本書はそのうち最も流布した二度本の内容を持ちます。

(川上・高橋)

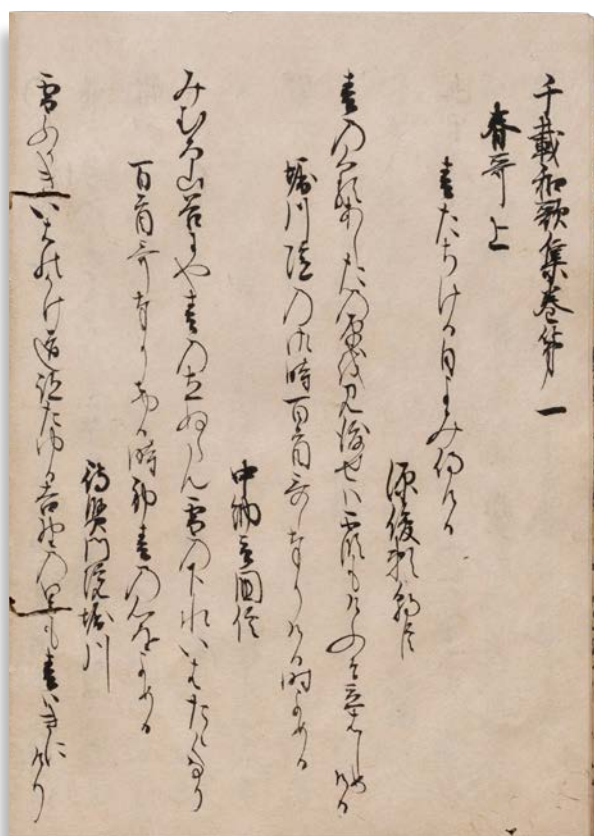
五番目の勅撰和歌集



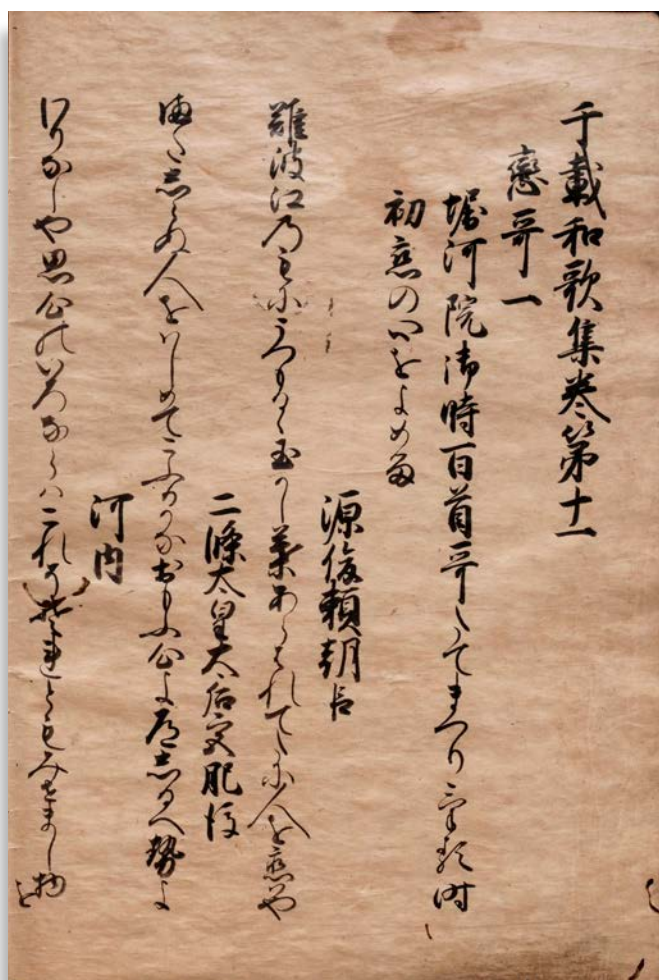
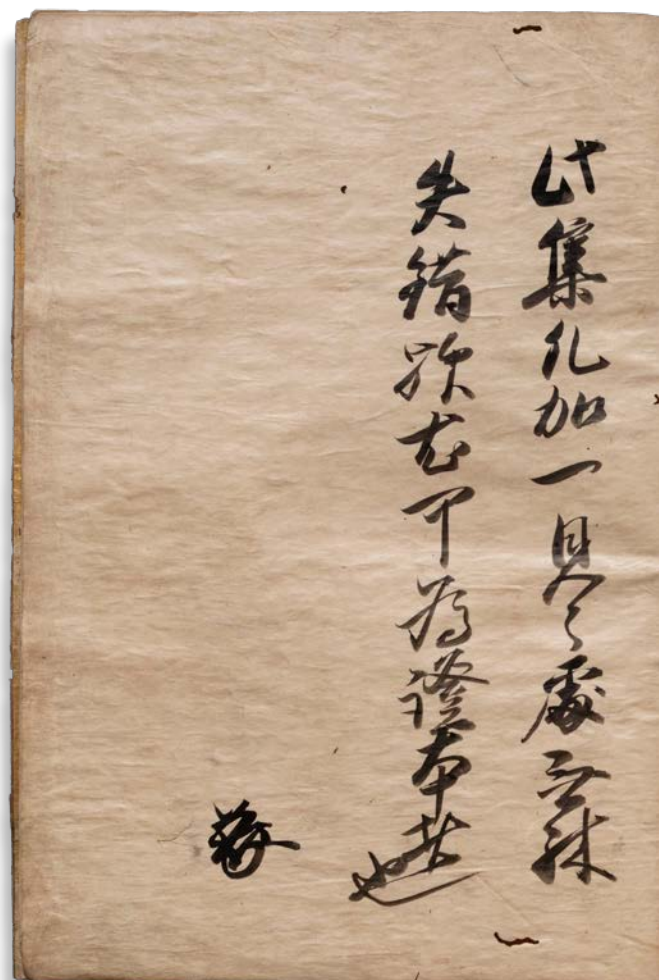
1 4 千載和歌集

松野文庫の千載集コレクションを御覧ください

『千載和歌集』は、平安末期に編纂された七番目の勅撰和歌集です。全二〇巻。ふじわらのしゅんざい藤原俊成奉勅撰。松野が生涯をかけて取り組んだ研究テーマであり、伝本の蒐集にも最も力を入れました。松野文庫収蔵の伝本は、写本版本併せて二七点。以下にその一端を御覧に入れます。本書は(1-3)『金葉和歌集』と二具の写本で、同じく松崎俊章筆を伝称筆者とする極札を備えます。なお『千載集』の本文は、和歌の出入りきじゅんか(基準歌)から甲乙丙丁の四類に大別されますが、本書は乙類本の特徴を有します。(川上・高橋)







1
|
5

千載和歌集

室町中期の古写本、
飛鳥井雅康の加証奥書
を備えます

室町中期書写の『千載和歌集』です。上巻欠の零本であり、厳密な系統分類は出来ませんが、松野は乙類本と推定しています。本書は極札に拠れば、室町幕府政所執事代蜷川親元（一四三三～八八）筆。巻末には歌道師範飛鳥井雅康（一四三六～一五〇九）の加証奥書を備えます。加証奥書とは、本の伝来や素性を保証するため記される奥書のことです。ここでも「尤可為証本者也（尤も証本たるべきものなり）」と本書の信頼性を証明しています。なお末尾に据えられている図様を「花押」といいます（書き判とも）。それぞれ形状が異なり、当時における署名（サイン）の役割を持ちます。

（川上・高橋）

千載和歌集卷第一

春寄上

よもつらもめ日る人けぬ

源俊賴朝臣

昔のありぬをふとせぬあはれぬきりぬ
堀河院の御へもて百首のこころ
ふはるもめ時ふぬ

中納言國信

みじふそふと風を雪はなをふとふと

百首の歌ふとふとけふ時初め

のふとふとけふ 待賢院堀河

雪ふとふとふとふとふとふとふと

けふの院の御時百首のふとふと

けふもめ時雪ふとふとふと

前中納言通房

道ふとふと物ふとふとふとふとふと

1 - 6

千載和歌集

「折紙つき」の伝本

室町後期書写の『千載和歌集』。乙類系の伝本です。本書には伝来を伝える奥書等は存在しません。後代の古筆見（鑑定家）による折紙が備わります。折紙とは古筆見による鑑定結果を記した証明書のことで、上下二つ折りにした料紙（＝折紙）を用いることからこの名があります（「折紙つき」の語源です。なおこれを簡略化したのが「極札」です）。本書に付属する折紙は、江戸中期の古筆家神田道伴によって正徳四年（一七二四）に認められたもの。本文を室町期の曼殊院門跡慈運（一四六六～一五三七）、外題は江戸前期の公家高辻豊長（一六二五～一七〇二）の筆と極めています。（川上・高橋）

千載和歌集 全部

上巻 巻頭 春のふと
下巻 巻頭 秋のふと

右

曼殊院門跡慈運大僧正真筆

外題

高辻相豊長卿古筆

共に不涉異論者也

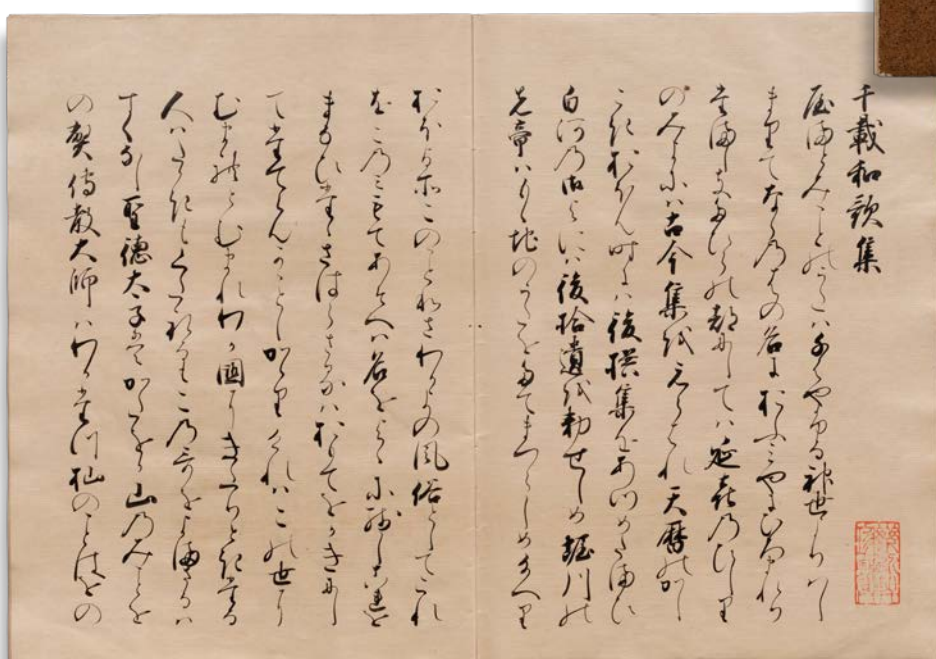
求證之

金武牧

神田道伴

正徳四年

甲 千載春上句

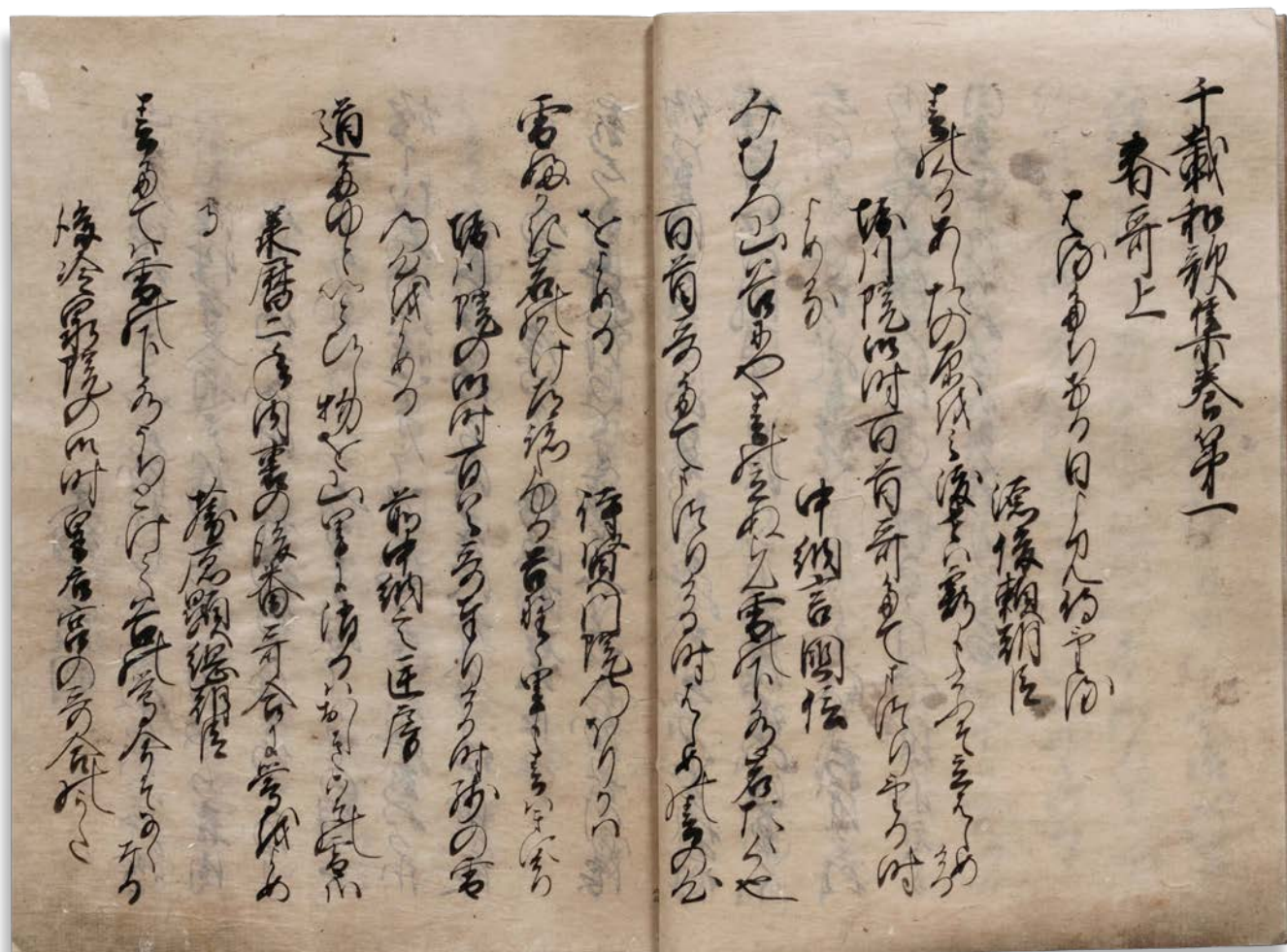


西本願寺旧蔵二十一代集 の一本です

西本願寺旧蔵本。茶色地に金銀縦筋目の特徴的な表紙、見返しに「写字台／之蔵書」の蔵書印をもつ、いわゆる写字台旧蔵二十一代集のうちの一本です（「写字台」は本願寺門主の居室の意）。江戸前期の公家飛鳥井雅章（一六一一〜七九）が書写した二十一代集（宮内庁書陵部現蔵）の副本とみられ、同種の写本が龍谷大学図書館、鶴見大学図書館等、複数機関に蔵されています。本書には慶長一〇年（一六〇五）の中院通勝による本奥書があり、その親本に三条西実隆筆本を用いた旨が記されます。伝来の面からも、素性の良さが窺える一本です。

（川上・高橋）

1 | 7 千載和歌集

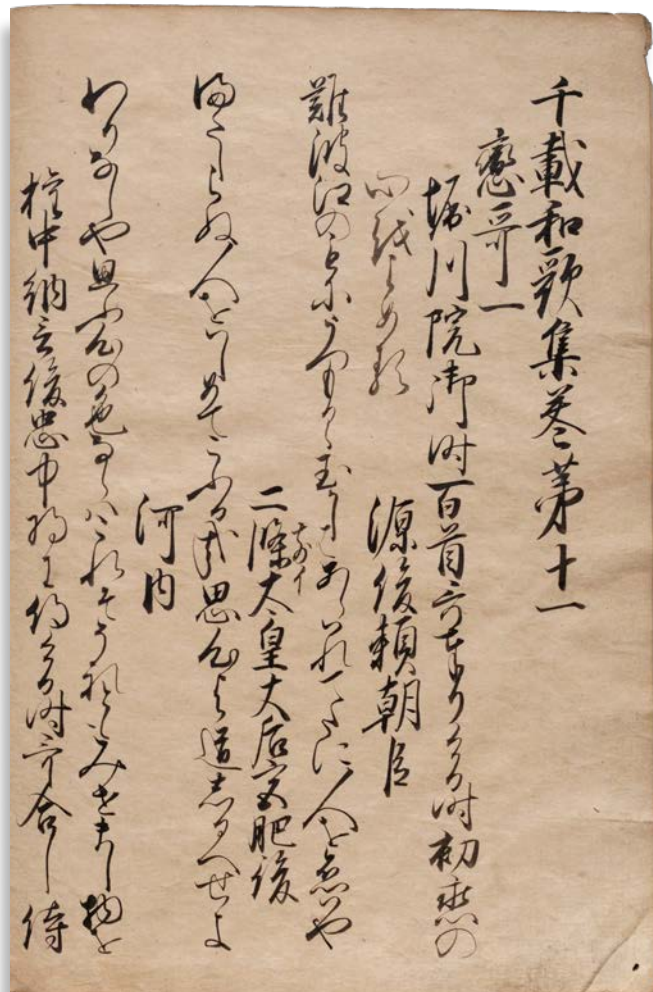
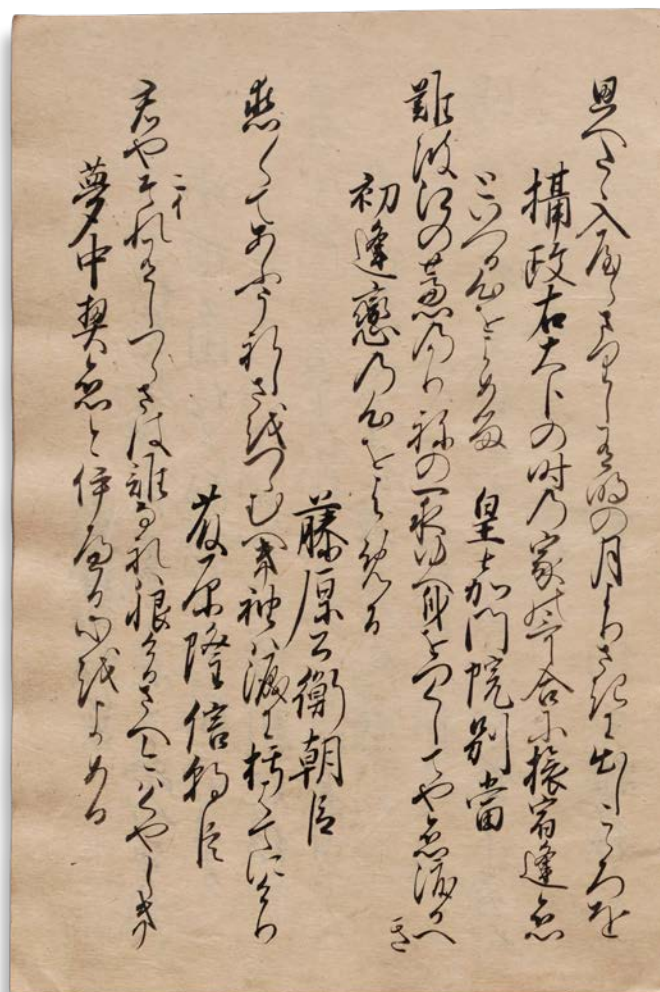


1 — 8 千載和歌集

大島雅太郎旧蔵、
三冊本の千載集です

あまり例のない三冊本の『千載和歌集』写本です。巻一〜七（雪冊）、巻八〜一三（月冊）、巻一四〜二〇（花冊）に分冊されています（冊次は外題によります）。冊次や表紙、装訂など、後代による改装の跡が目立つ本ですが、本文の書写年代は室町時代前期を下らないとみられ、松野文庫内でも最古級の古写本です。本文は乙類。冒頭に「青谿／書屋」の印記があり、青谿書屋本『土佐日記』や大島本『源氏物語』の旧蔵者として有名な大島雅太郎（一八六八〜一九四八）のコレクションの一つであったと知られます。

（川上）



1
|
9

千載和歌集

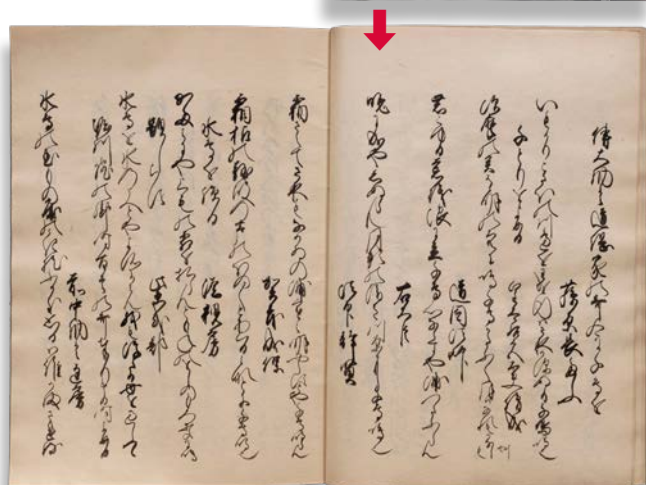
架蔵中最善本

〔江戸前期〕書写。存下巻。本文は松野により乙類本と推定されています。奥書や識語等、伝来に関わる特徴は見出だせませんが、書写態度は極めて精緻かつ正確。松野本人も、その著書『千載集前後』で「架蔵本中最善本」（二二八頁）と太鼓判を捺す、松野文庫を代表する善本です。現在所在不明となっている上巻の出現が切に望まれます。（川上）

1 10 千載和歌集

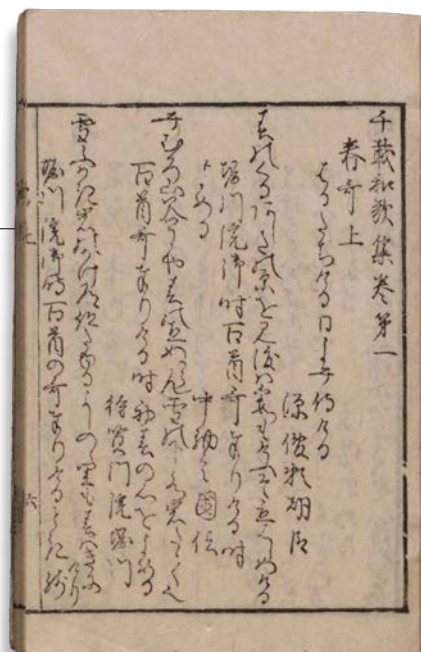
たまには別系統本も

〔江戸前期〕書写。紺地に金泥下絵の表紙を具えた美本です。ここまでの『千載集』写本は全て乙類系でしたが、本書は丙類系の伝本です。上冊の展示箇所に見える「暁に成やしぬらん月影の清き川原に千鳥鳴也」（巻六・冬・右大臣）は、甲乙類本には見られない歌で（丁類にはあり）、分類の際の基準歌となります。本書は、ジャーナリスト小汀利得（一八八九―一九七二）の旧蔵品。末尾に「をばま」の印記があります。（川上）



1 11 千載和歌集

てのひらの千載集



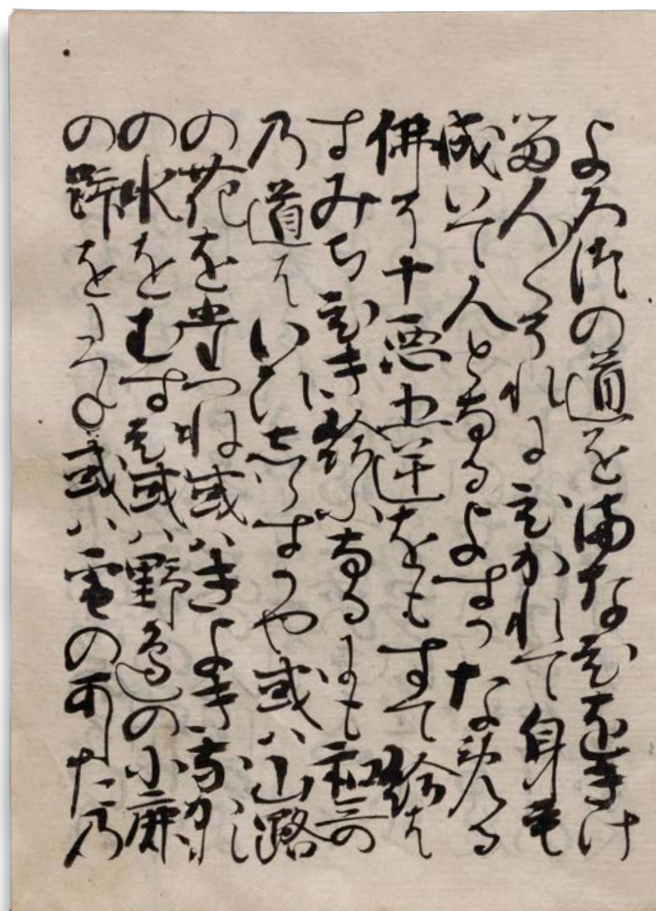
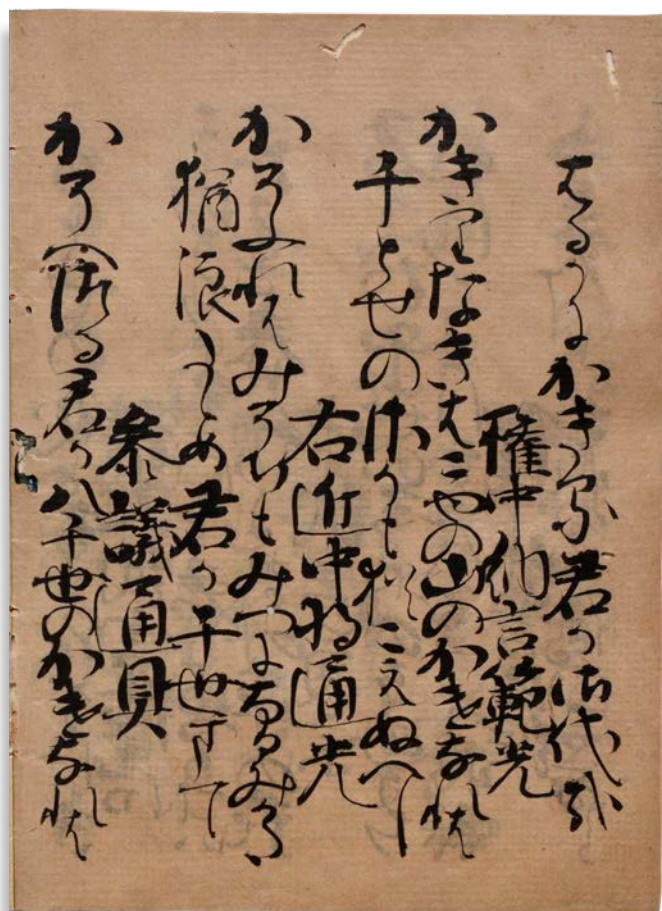
文政七年（一八二四）に京の吉田四郎右衛門・遠藤平左衛門・出雲寺文次郎によって刊行された特小本の千載和歌集です。絹表紙で料紙は薄様。千載集の写本は甲乙丙丁の四系統に分類されますが、版本は北村季吟著『八代集抄』（天和二年刊）のみが丁類で、他はすべて丙類です。よって、千載集の版本は、最初に刊行された正保版二十一代集（大本）と基本的には同一系統の本文を有しています。ただし、特小本の作者表記は、正保版に次いで成立したと思しい無刊記二十一代集（小本）と一致し、本文の性質も近似しています。なお、江戸期にはこのような極小の歌書が、体系的ではないものの他にも刊行されました。（加藤）

1 | 12 「千載和歌集かるた」



千載和歌集、 四季の歌々をかるたで

大変珍しい、『千載和歌集』のかるたです。上の句の札裏には下の句が書かれ、両面で一首を読み上げることが出来ます。四季の歌四七五首中、春・秋歌から各六〇首、夏・冬歌から各四〇首を選んでいきます。選歌においては、四季各部から巻頭歌を含む数首（春・秋なら六首、夏・冬なら四首）が選ばれ、そこに連続する九首を抜いたようです。例えば、藤原清輔の紅葉を詠んだ歌、「今ぞしる手向の山はもみぢ葉のぬさとちりかふ名こそ有りけれ」などが選ばれています。（甲斐）

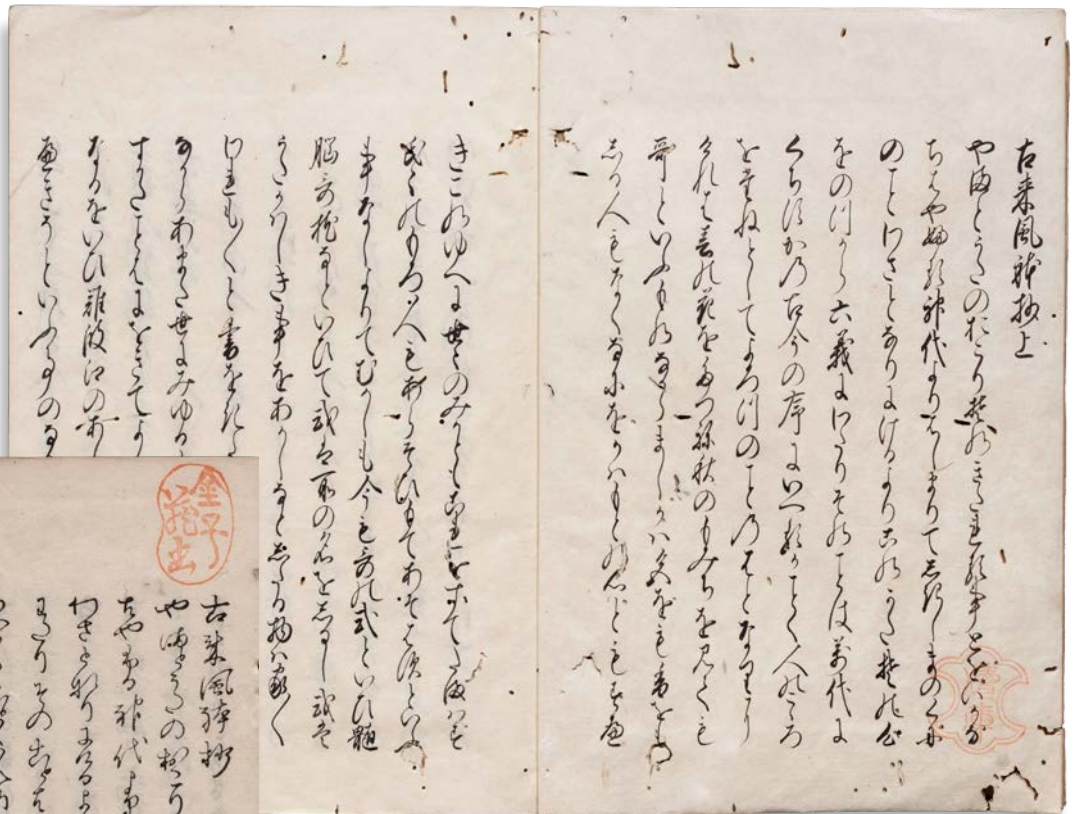


1
|
14

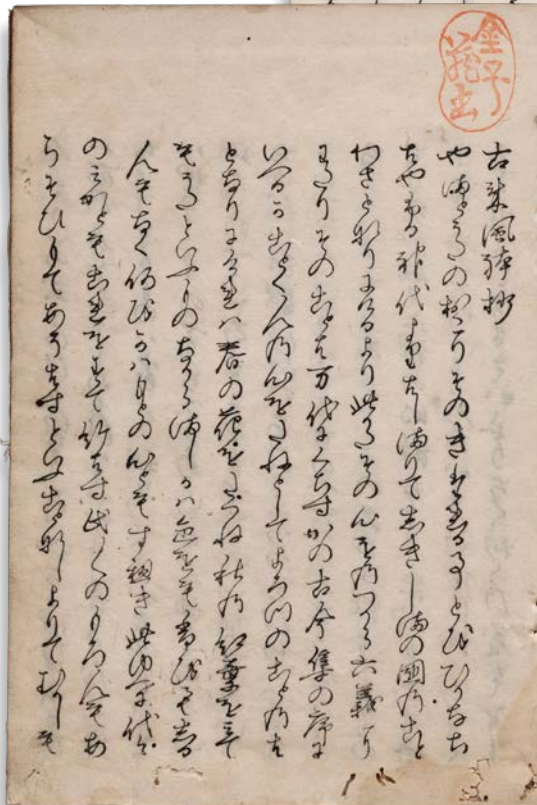
俊成九十賀之歌

俊成の長寿を言祝ぐ
賀会の記録

建仁二年（一二〇三）十一月二三日、後鳥羽院の主催により藤原俊成の九〇歳を賀する祝宴が催された。本書はその様子や詠まれた和歌などを記した記録で、源家長（？）（一二三四）が記した仮名日記から本文を抄出したものです。展示の松野文庫蔵本の書写者は、江戸前期の旗本で俳人としても知られる岡田善政（一六〇五〜七七）。小ぶりな本ですが、お洒落な色替わり料紙に、藤原定家の筆跡を模した定家様と呼ばれる書風が目を引きまます。（館野）



1-15



1-16

1
|
15

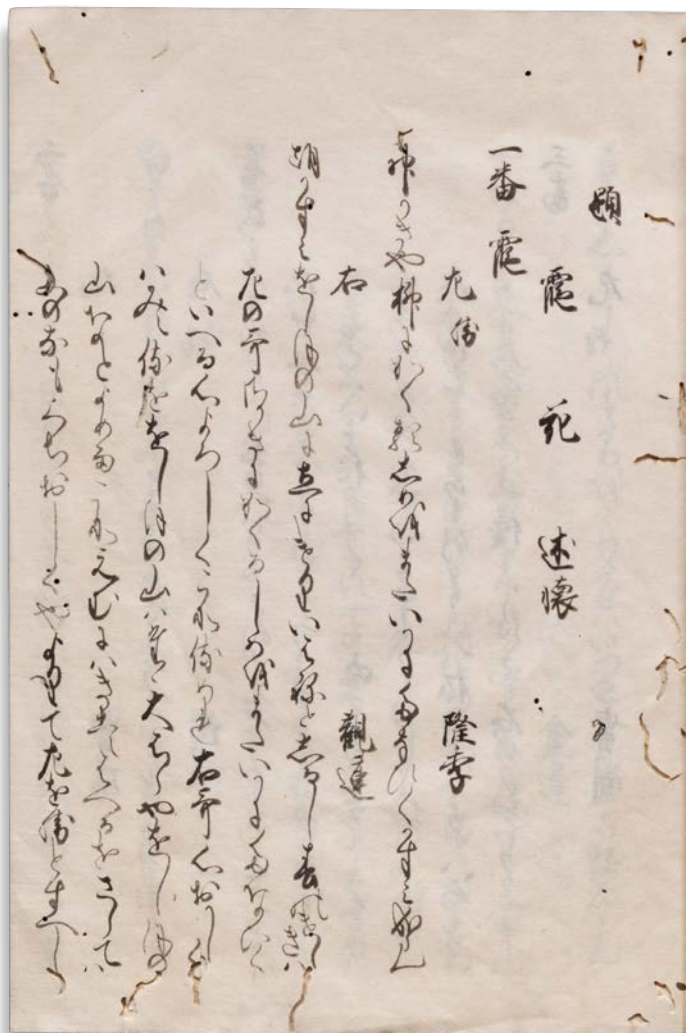
こ
ら
ふ
う
て
い
し
や
う
古来風神抄

1
|
16

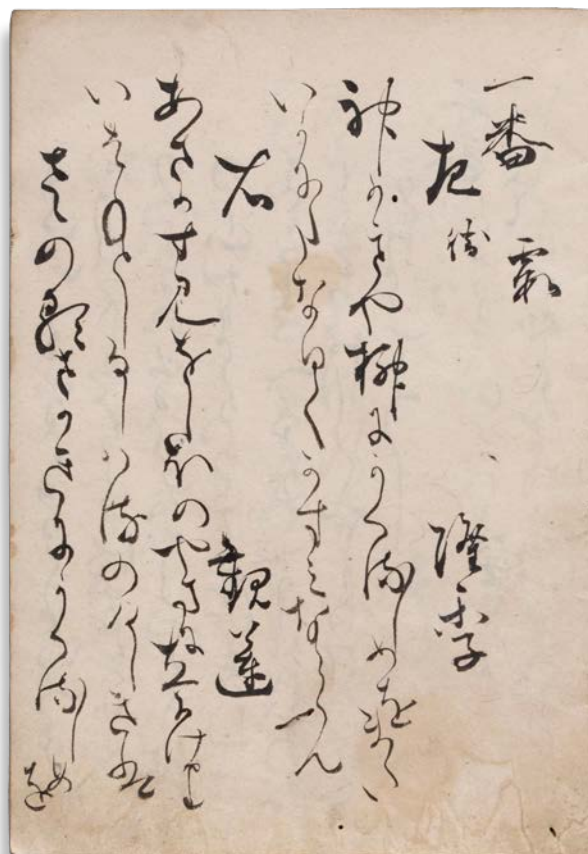
古来風神抄

和歌の表現様式の
史的展開を論じています

俊成晩年の歌論です。上代から俊成の時代に至るまでの和歌の姿（表現様式）の史的变化について、具体的に和歌を挙げて示した書です。松野文庫には、御覧の二本（1-15）〔江戸前期〕写本と（1-16）元禄三年（一六九〇）刊本が収められています。蔵書印によって、前者は江戸前期の磐城平藩主内藤風虎（二六一九〜八五）及び江戸中期の国学者加藤磯足（一七四七〜一八〇九）の、後者は近代の国文学者である金子彦次郎（一八八九〜一九五八）の旧蔵書であったことが分かります。（館野）



1-18



1-17

1 | 18 別雷社歌合

1 | 17 別雷社〔歌合〕

わ け い か ず ち し や う た あ わ せ

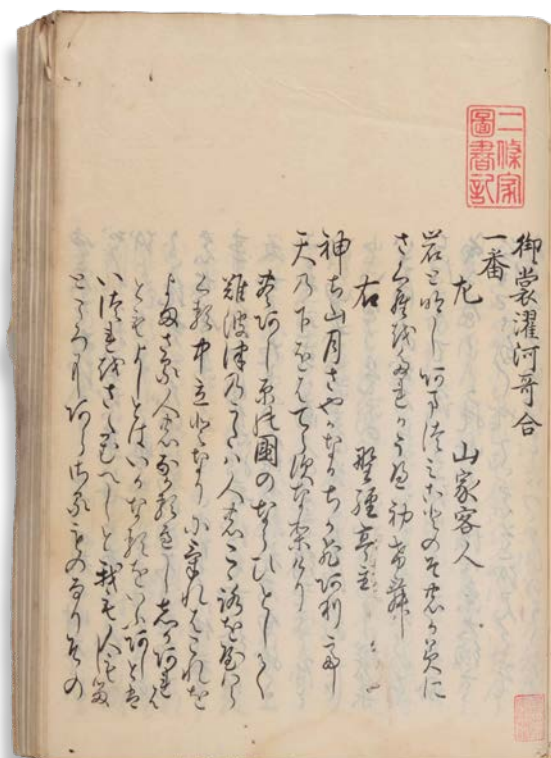
賀茂別雷社（上賀茂神社）の神主賀茂重保が主催した歌合です。治承二年（一一七八）三月一五日成立。総勢六〇名が「霞・花・述懐」の三題を詠じ、九〇番とした大規模な歌合で、藤原俊成（法名釈阿）が判者を務めました。俊成にとっては安元二年（一一七六）の出家後初の歌壇活動であり、その事績の上でも注目すべき催しです。本歌合の写本は比較的多く、松野文庫にも御覧の二本（1-17）（江戸前期）写本と（1-18）（江戸中期）写本があります。それぞれ半紙本、大本と書型を異にしますが、いずれも室町時代の公家三条西実隆筆本をもって書写した旨の本奥書を備える同系写本です。なお（1-18）には「南天荘」の蔵書印があり、医者で桂園派歌人・国文学者の井上通泰旧蔵と知られます。（柿沼・川上）

異なる書型の同系写本

1 19 御裳濯河歌合ほか

俊成・定家・為家三代の歌事加判

『御裳濯河歌合』『宮河歌合』『藤川百首抄』の合写本。〔江戸後期〕写。西行は晩年に至り、自作より秀歌一四四首を選出、二種の三十六番自歌合とし、伊勢神宮に奉納しました。内宮に奉納されたものが『御裳濯河歌合』、外宮に奉納されたものが『宮河歌合』です。それぞれ俊成とその息定家が判詞を依頼されています。『藤川百首抄』は、定家詠とされる藤川百首題百首（難題百首とも）およびその歌注に、為家・為定・阿仏尼・実隆による同題百首を後補したものです。松野文庫蔵本は、歌数等に他の伝本と若干の異同があり注目されます。撰家二条家旧蔵。（甲斐）

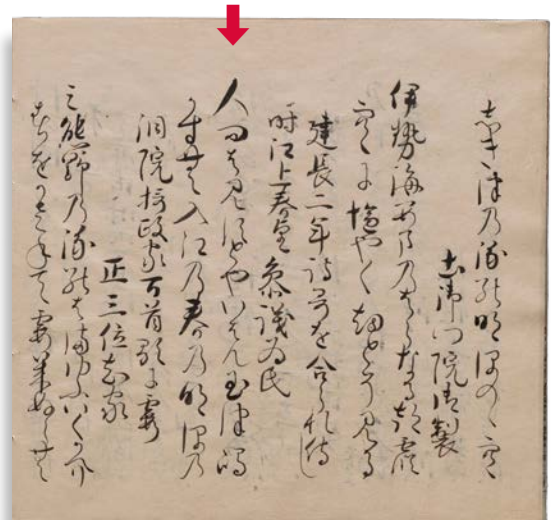


1 20 続後撰和歌集

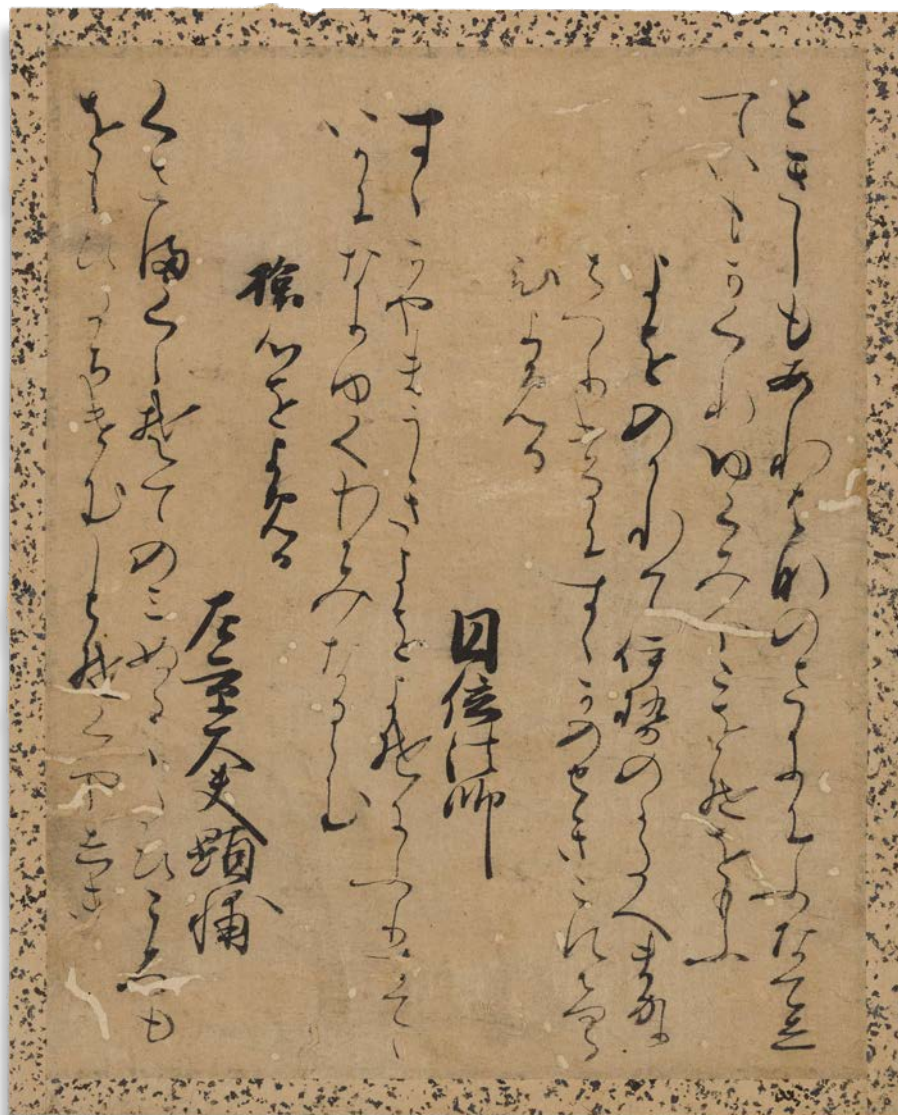
俊成の孫、為家撰の勅撰集

一〇番目の勅撰和歌集です。藤原為家（一一八〇―一二七五）奉勅撰。為家は定家の子、俊成にとつては孫にあたります。俊成・定家、為家の三代が連続して勅撰集撰者をつとめたことで、御子左家（俊成の家系）の「和歌の家」としての権威は確たるものとなり、以後、勅撰集の撰者は同家出身者がほぼ独占することになります。

本書は〔江戸中期〕写の梶型本。続後撰集は初撰本（未精選本）から精選本まで、複数段階の本文が伝存しますが、松野文庫蔵本はその途中、中間本に位置する伝本です。展示箇所は、



為家の息為氏の名歌「人間ば見ずとやいはん玉津嶋かすむ入江の春の明ぼの」（巻一・春上）を含む部分。父為家による添削の逸話に名高い一首です。（川上）



1
|
21

「歌苑抄」断簡

俊成が活躍した時代の私撰集

西行を伝称筆者とする私撰集の断簡で、離別を主題とする和歌が三首並んでいます。ツレと推測できる別の断簡に散佚私撰集『歌苑抄』の佚文とされる和歌が載ることから、『歌苑抄』の断簡であると推定されます。『歌苑抄』は平安末期に俊成によって編纂された私撰集で、完本は残っておらず、断簡とはいえ貴重な本文資料です。なお本断簡のツレや他書に残る佚文から、この私撰集に俊成の歌も収められていたことが確認できます。(館野)

第二部

江戸の武家歌壇

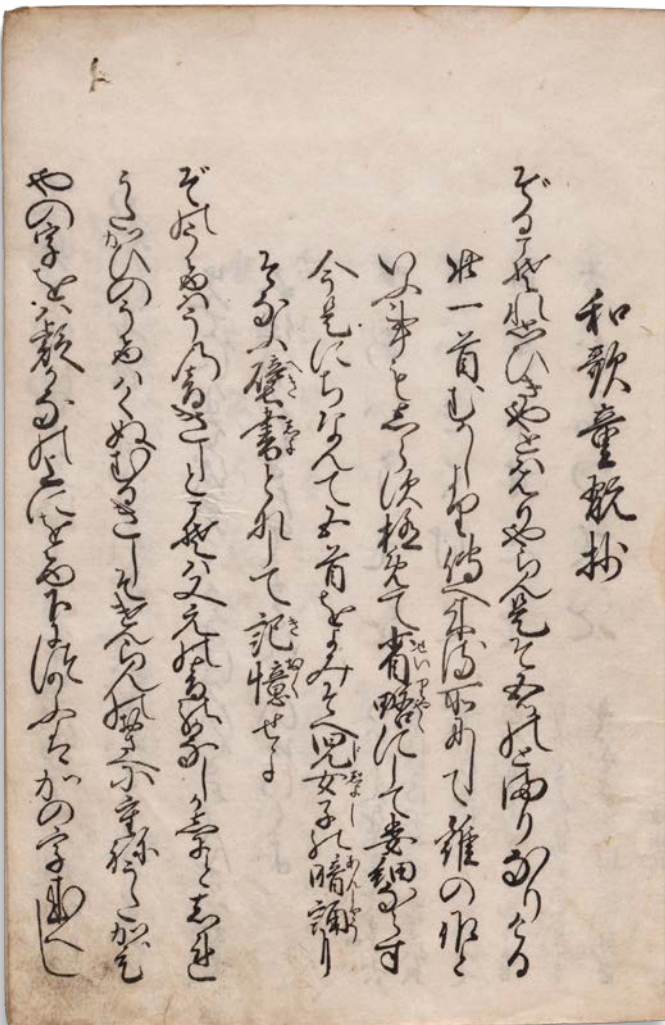
元 禄（一六八八～一七〇四）前後の江戸の地には、水戸家ゆかりの山本春正・清水宗川・岡本宗好らを中心として「歌壇」が成立していました。このうち原安適と柏木素龍は、芭蕉との雅交が知られるなど俳諧史との交渉が注意されます。

やがて一八世紀に入ると、その江戸の地に、武家を中心とした歌壇（第二世代）が形成されます。その緒は、京都町奉行与力にして中院通茂門の松井幸隆が正徳年間（一七二一～一六）に江戸に下ったことにより、切り拓かれました。その幸隆に連なる連阿（時宗僧）・亨弁（日蓮宗僧）・萩原宗固・石野広通・伊藤松軒らを、文学史では「江戸堂上派」と呼んでいます。従来この期の江戸の地は、賀茂真淵を中心とする古学派（県門）のみが叙述されてきましたが、彼ら江戸堂上派はそれをはるかに凌駕していたことが明らかにされています。特に、「明和六歌仙」のひとりである宗固は、内山賀邸とともに『明和十五番狂歌合』の判者を務めるなど江戸狂歌壇との関わりが注意されますし、その宗固を含む江戸冷泉門の展開も極めて重要です。広通の後裔に当たる石野政雄の先駆的な業績を踏まえて、この領域の研究を牽引してきたのが松野陽一であり、久保田啓一氏（広島大学大学院文学研究科教授）です。

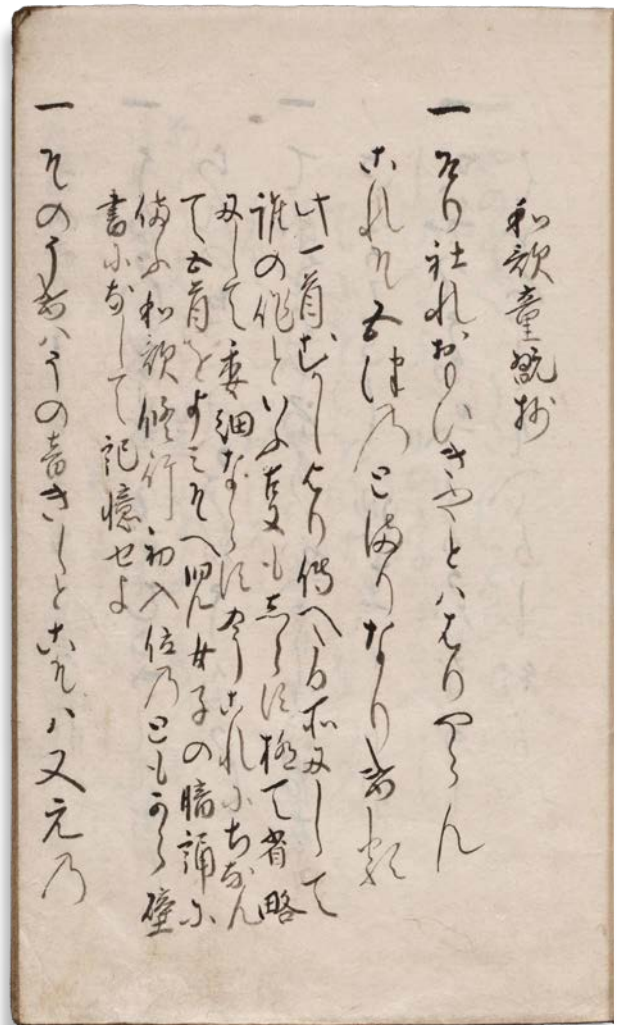
松野陽一文庫には、亨弁や広通の書目がまとまって収められており、松平定信や堀田正敦ら楽翁文化圏の人びとの関係書目とともに、この第二部で紹介いたします。

なお、かつて松野が副館長職にあった一九九五年に国文研に収められた石野政雄旧蔵書（全二五一点）の中から、『招嘲集』（亨弁家集）や『芝君和歌集』（芝山持豊家集）など四点を参考出品します。

（神作）



2-3



2-2

2
|
3

2
|
2

和歌童翫抄

わ か ど う が ん し ょ う
和歌童翫抄

亨弁(こうべん) (？～一七五五) が、和歌の初心者向けに係り結びや仮名遣いの法則などを三十一文字に詠み、解説を付した啓蒙的歌学書です。諸伝本は広本と略本(甲類・乙類)の二系あり、版本には多くの異版があります。写本の多くは略本系、版本は広本系の本文を有します。系統によって、自序に記される著者の表記も異なり、略本系は小釈亨弁、広本系は遁危子とあります。(2-2) は略本系写本の善本であり、自序の記された寛延二年(一七四九)は、初版刊行の五年前にあたります。(2-3) は宝暦四年(一七五四)に江戸の大坂屋平三郎によって出版された初版の早印本です。(加藤)

和歌のテニヲハを
三十一文字で説明

石野 広通

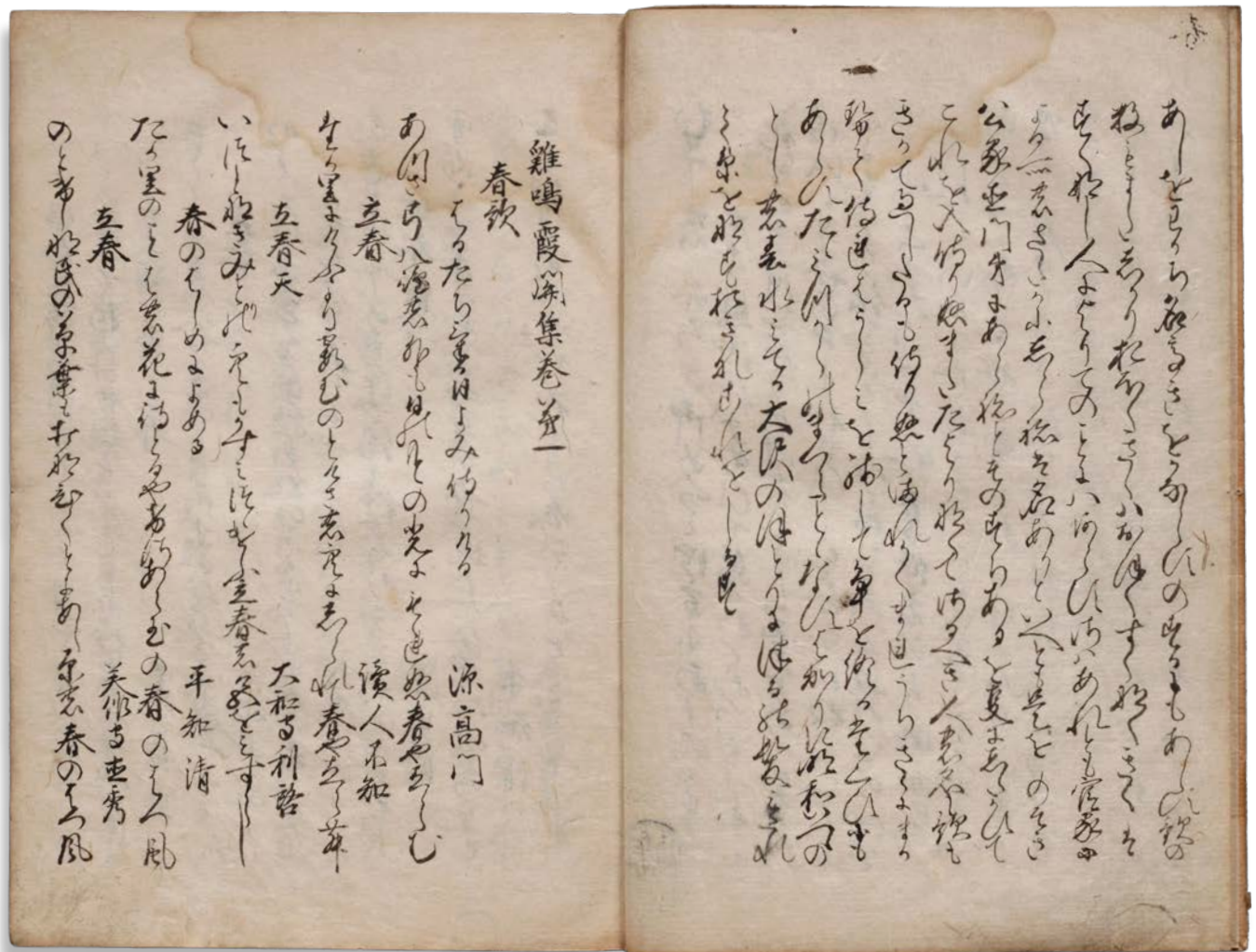
享保三年（一七一八）〜寛政一二年（一八〇〇）

石野広通は江戸中期の幕臣・歌人。姓、中原。号は大沢・蹄溪など。遠江守・備後守、従五位下。佐渡奉行・御普請奉行を務めました。三〇〇石。父は旗本の石野広包。

田安宗武・萩原宗固・賀茂真淵・内山賀邸・磯野政武とともに「明和六歌仙」と称された、江戸堂上派歌壇の中心的人物です。初め武者小路公野・高松重季に師事し、のち冷泉為村に入門しました。四〇余りに及ぶ著作の中には、『玉川上水之記』のような官務による治水の書物も含まれますが、何と言っても大切なのは、『霞関集』なる江戸堂上派武家歌人の私撰集を編んだことです（初撰本は明和五年（一七六八）春成立。再撰本は寛政一一年（一七九九）刊）。賀茂真淵など古学派歌人たちの和歌を除外しているところに大きな特徴があり、当代の江戸歌壇が真淵ら古学派一色ではなかったことがよくよく窺えて貴重です。また、例えば『源語演説抄』は、二条派系の〈知〉の伝播の具体相が追跡できる、重要な文学史的問題を内包した源氏注釈書です。『和歌感応抄』『大沢随筆』『蹄溪随筆』などの歌学関連の随想随筆類も興味深く、広通の文事の総合的な解明が待たれます。なお、家集『沢蘆集』は第一冊がかつて一度古書市場に出現しましたが（一九九八年）、現存は不明です。

松野文庫には『鶏鳴霞関集』（初撰本）をはじめとする広通関係書目が都合七点含まれており、松野がひとときわ熱心に広通作品の蒐集に努めていたことが分かります。本展示では、『霞関集』の初撰本と再撰本に加えて稀書二点（『延年観再点連歌』『絵空言』）を出展しますので、松野が広通に寄せる〈思い〉を感じ取っていただければ嬉しく思います。

（小野寺・神作）



江戸堂上派による私撰集、
その初撰本です

『霞関集』^{かかんしゅう}は石野広通撰の私撰集で、本書はその初撰本。明和五年（一七六八）成。〔江戸後期〕写。六巻二冊。書名は広通の居所に因みます。巻頭は京極高門^{きょうごくたかかど}、巻軸は石野広通^{いしのひろとく}で、享保から明和（一七一六～七二）に至る総勢一三四人、一、〇〇〇首余りを収載します（現存本は欠落があつて歌数を確定できない）。冷泉門^{れいぜいもん}を中心に二条派を含んだ江戸堂上派武家歌壇の代表的私撰集であり、真淵^{まぶち}ら古学派を排除しているところに大きな特徴があります（初撰本に「冷泉家門人、公儀連歌師坂昌周子」として入集する「坂昌和」^{むらたはるみ}は村田春海その人であり、再撰本で削除されているのは好例）。末尾には「鶏鳴霞関集作者目録」を付載。初撰本はすべて写本で、他の伝本に慶應義塾図書館蔵本（渡辺刀水旧蔵）・弘前市立図書館蔵本（恋雑部^{こいざつぶ}のみ）があります。弘前市立図書館蔵本を底本として、その雑部のみが、ほかならぬ松野の校注によって新日本古典文学大系『近世歌文集 上』に収められています。

（小野寺・神作）

2
—
4

鶏鳴霞関集

けいめいかかんしゅう

霞関集 卷第一

春歌

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

原高門 京極

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

ふんきくし

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

大智利唐 巨勢

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

平和清 板植

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

天竺寺 蓮秀 林

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

遠江の廣通 石野

あつちややゆめや日あけの光もいづれもやまじ

2
—
5

霞関集

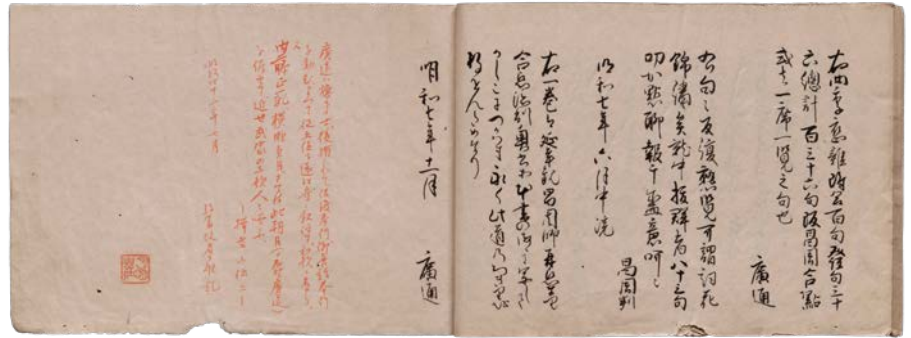
再撰本の写しです

『霞関集』の再撰本は、佐々木万彦^{ひこ}（広通男）によって寛政十一年（一七九九）に刊行され（蹄溪蔵版）、これが流布しました。本書はその写しで、宝永から寛政（一七〇四〜一八〇二）に至る一八八人の江戸堂上派武家歌人の和歌一二六首を収めます（「作者目録」を欠く）。「江戸後期」写。初撰本よりも冷泉門以外に広く目を配っていますが、やはり古学派を排除しています。因みに、刊本で一冊を充てる「霞関集作者目録」は、役職や没年・著書を記すなど初撰本のそれよりも相当に詳しい内容を有しており、彼ら江戸堂上派武家歌人たちの伝記資料としても貴重です。松野によって、寛政十一年刊本を底本として「霞関集作者目録」ともども古典文庫『霞関集』（一九八二）に翻印されています。（小野寺・神作）

2-6

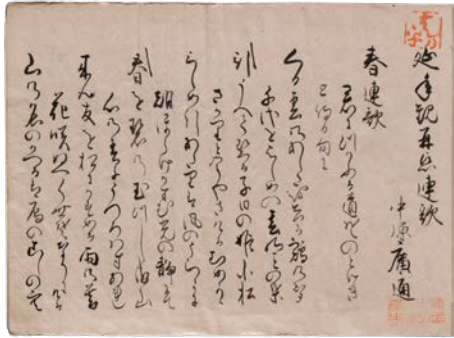
延年観再点連歌

えんねんかんさいてんれんが



珍しい広通の連歌集、
しかも自筆です

石野広通の連歌集です（自筆）。横本一冊（外題は「広通家集」）。奥書に拠れば、広通の四季恋雑の附合一〇〇句および発句三六句、計一三六句に延年観（公儀連歌師坂昌周（？）一七八四）が合点を付し、明和七年（一七七〇）六月に再度合点したものを、同年十一月に広通が清書して昌周に送ったものです。巻首に押捺された蔵書印「米斎／中之／右図／左吏」により、画家の久保

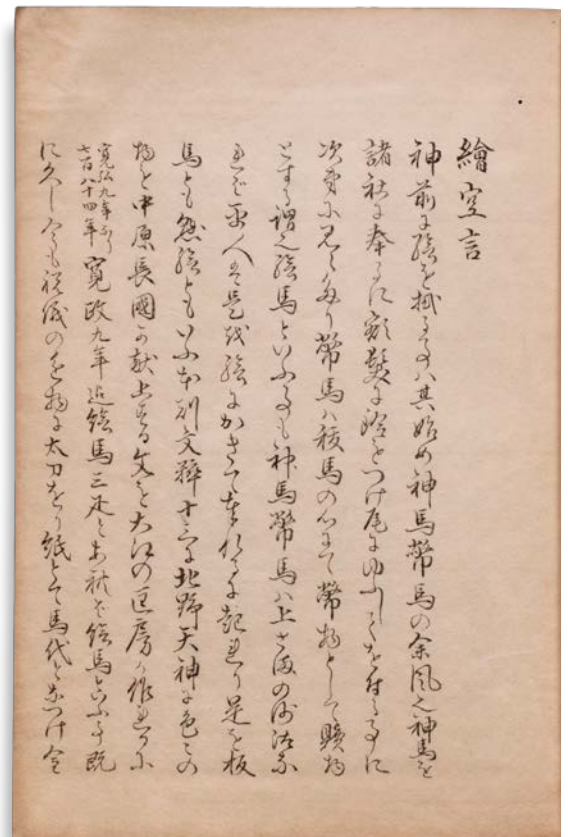


田米斎（久保田米僊男）の旧蔵と知られ、弥富破摩雄を経て、反町弘文荘が扱いました。末尾には、明治四三年七月の弥富破摩雄の識語（朱書）があります。（小野寺・神作）

2-7

絵空言

えそらごと



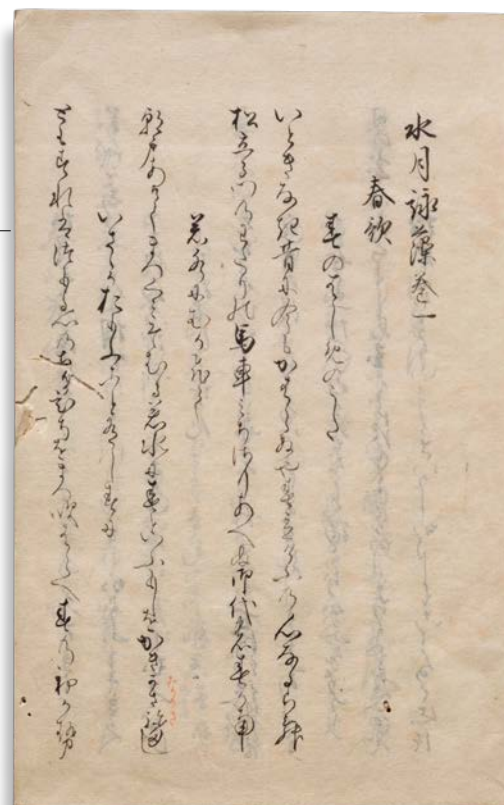
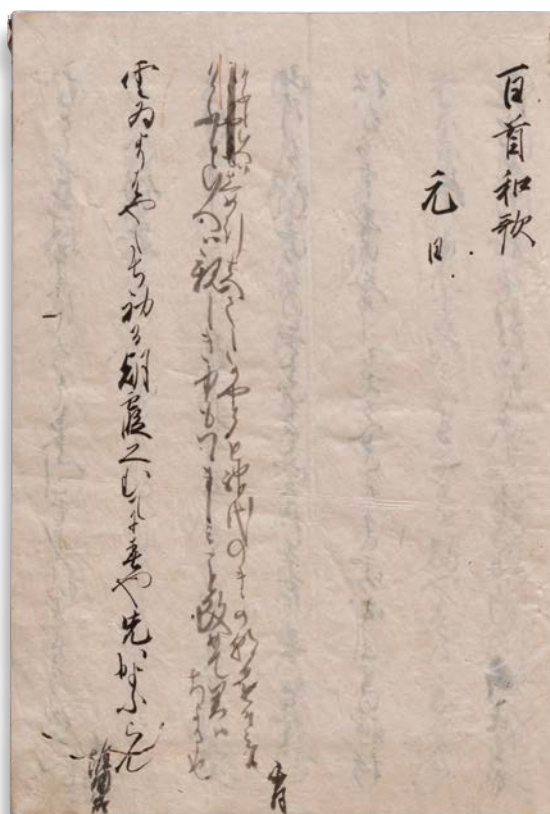
画論書というよりも知的遊戯の戯作風

天智天皇・鎌足・小野小町・紫式部・西行・久米仙人ら古来の懸絵の人物が抜け出して、自らに対する後世の誤伝に不平を述べた一種の夢ばなしを戯作風に綴った小品です。浮絵（透視画法）によって実景が立体的に浮き出て見えるように描いた絵）への言及も見出され、最後は宝船が出て締め括られます、広通最晩年の寛政九年（一七九七）頃の成立。「燕石十種」に収められています、単独伝本は稀で、他には静嘉堂文庫蔵本が知られるのみです。（小野寺・神作）

2-8 堀川後度百首三吟

白河楽翁歌壇を代表する歌会

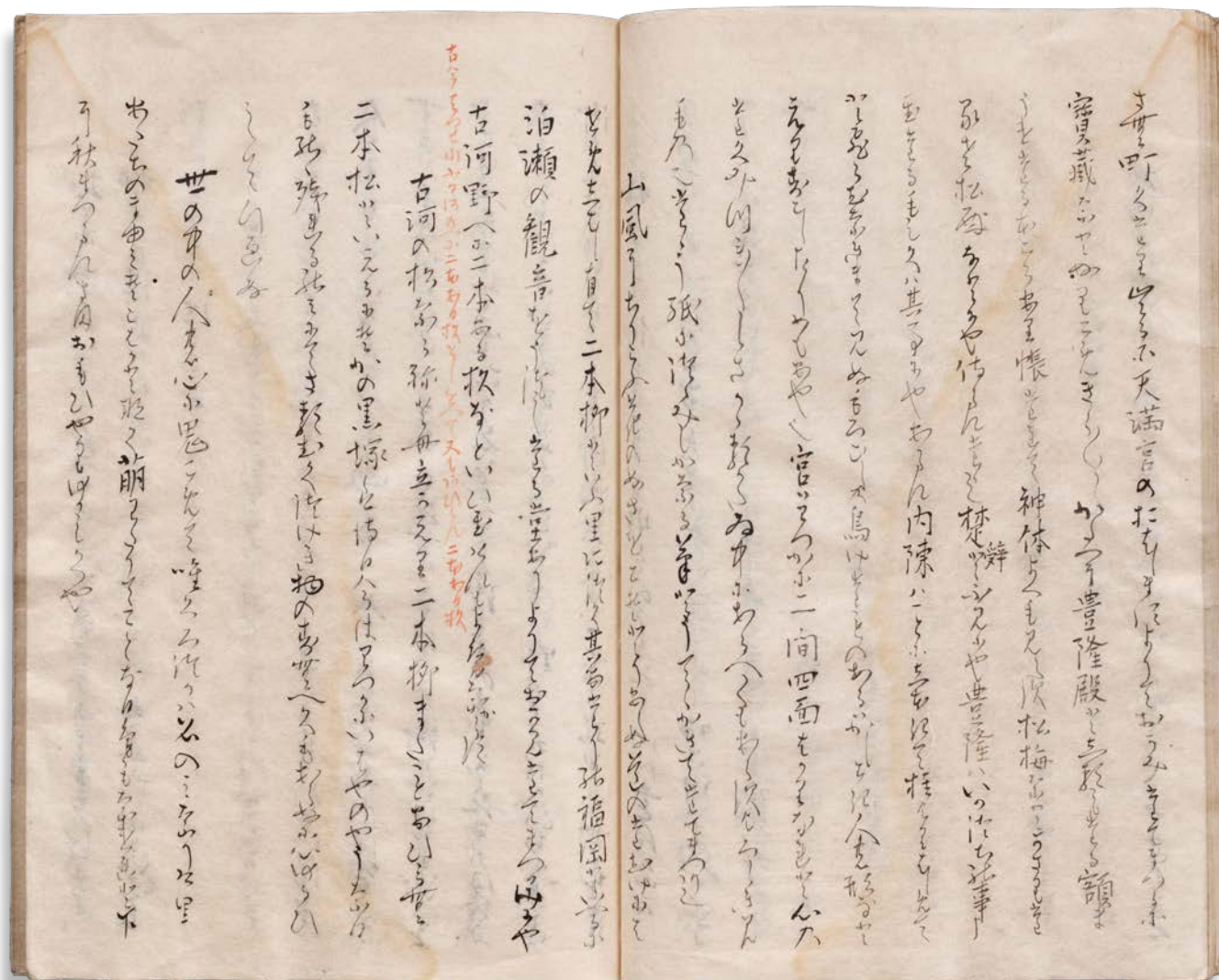
老中の松平定信（一七五九～一八二九）、若年寄の堀田正敦（一七五八～一八三三）、幕府歌学方の北村季文（一七七八～一八五〇）の三者が堀川後度百首（永久百首）題で詠んだ百首歌。白河楽翁歌壇を代表する歌会で、成立は文化年間と思われます。正敦と季文が先行して詠んだ歌が清書され、定信の欄に定信が草案段階の和歌を書き入れて推敲している、定信草稿本です（松野陽一『書影手帖しばしとてこそ』一九九頁）。花かつみに唐草文は定信の好み表紙。見返しには定信側近の田内親輔（月堂）の識語があり、成立事情が記されています。反町茂雄の印記あり。（神作・高橋）



2-9 水月詠藻

堀田正敦の和歌の豊かさ

堀田正敦（一七五八～一八三三）は仙台藩主伊達宗村の八男で、本書はその家集です。松平定信序。北村季文奥。原装の打曇り表紙が美しい。松平定信文化圏の中心人物として、その詠歌の豊かさがよくよく窥えます。「春のはじめのうた」との詞書を持つ巻頭歌は、「いときなき昔に今もかはらぬや春立けふの心なるらむ」。印記「伊達伯／観瀾閣／図書印」により、ほかならぬ仙台藩伊達家の旧蔵と知られる、貴重な一本です。（神作）



仙台藩士による、 知られざる江戸紀行

仙台藩の儒者畑中盛雄（一七三四〜九八）による紀行文です。盛雄は通称太冲、号を荷沢といい、藩を代表する儒者ですが、和文の業績も多く残しています。本書は、安永六年（一七七七）、藩主伊達重村の江戸出府に随行した際の紀行文で、仙台から江戸に至る九日間の旅程を、八二首の和歌とともに流麗な和文で綴っています。展示箇所は、名所（歌枕）「安達の原の黒塚」（現福島県二本松市）を通過する場面。その「世の中の人の心に鬼こめて唯くろづかは名のみなりけり」は『大和物語』の平兼盛歌を踏まえた作で、広く評判を得たと伝えられます。のちに『宮城百人一首』（慶応二年（一八六六）成、日野資始撰）にも選ばれました。

（川上）

2 | 11 行之記

〔江都〕

諏訪台八景詩歌

歌聖柿本人麻呂千年忌に関わる歌事

享保八年（一七二三）は歌聖柿本人麻呂の千年忌にあたることされ、歌会や勧進和歌の奉納が全国各地で催されました。「諏訪台」は現荒川区西日暮里の旧道灌山を含む高台で、同地浄光寺の住職宝山（生没年未詳）が八景を選定、本作品の詩歌は、人麻呂千年忌前夜の享保六年に作られたものです。正徳・享保年間（一七一～一三六）は江戸歌壇が自立し始めた時期で、釣月は関東下向の指導者でした。享保三年（一七二八）序刊（井上通熙序）。絵入り（絵師未詳）。新日本古典文学大系『近世歌文集 上』で松野が校注を担当しています。

（福澤）

飛鳥山十二景詩歌
并碑

桜の名所飛鳥山からの絶景

飛鳥山（現北区王子）は今も都内有数の桜の名所ですが、それは、江戸中期の享保一一、一二年（一七二六、二七）頃に、將軍徳川吉宗がこの地に浜御殿などから桜樹千株を移植したことに始まります。大学頭林信充は十二景を設えてその名所題による七言絶句を賦し、芥川寸草ら江戸堂上派の武家歌人たちは和歌を詠じて、金輪寺に奉納しました。この雅事は、江戸の地の武家歌人たちによる名所和歌の催しとして注目されます。この作品には二種があり、本書は幕末の安政五年（一八五八）刊本。絵入り（彩色摺り、鷺湖木雄画）。扉題「飛鳥山勝景」。新日本古典文学大系『近世歌文集 上』で松野が校注を担当しています。

（神作・福澤）





2 | 14

和歌渚の松

狂歌を和歌の体系に 位置付けた私撰集

風也軒（生没年未詳）によって編纂された全二〇巻の私撰集です。源九阜による挿絵入り。戸田茂睡編『鳥の迹』（元禄一五年刊）などの系譜を引く撰集で、公家から遊女まで多彩な和歌を収めています。中心は江戸の武家歌人たちです。誹諧歌とは別に狂歌の部を立てている点が珍しく、江戸中期の狂歌師である元木網は、本書の誹諧歌・狂歌の一部を『新古今狂歌集』へ採録しています。菅原俊仍（松宮観山）の序文、風也軒の自跋のほか、刊記に続けて閑散野人浄光居士の跋文が付されています（無刊記本あり）。寛延元年（一七四八）八月に江戸書林の西村源六と前川庄兵衛によって出版されました。狩野亨吉・三宅清旧蔵。（加藤）



2
-
15

〔近世歌人和歌短冊〕

短冊いろいろ

短冊とは和歌を認める料紙のことで、室町時代より広く用いられるようになりました。多くは歌会での提出に用いられたものですが、のちには著名人が揮毫する際、短冊をもってすることもありました（和歌以外に漢詩・狂歌・発句・川柳等の場合もあります）。書式は上部に歌題、その下に和歌を二行書きし、末尾に実名で記名することを原則とします。自筆であること、自詠（オリジナル）であること（古歌を記すこともあります）、その場合は無記名）、何より名前が記されていることから、文学・筆跡資料としての価値は極めて高く、現代に至るまで、多くの蒐集家が生まれました。

松野文庫には近世歌人を中心とした和歌短冊が六〇有余枚収められています。それらの中から、江戸の武家歌人のものを中心に紹介します。松野の師岩津資雄（一九〇二〜九二）の短冊三葉のうち、一葉も添えます。

（川上・河田・福澤）

* 右から、今川氏真（宗閻）・連阿・萩原宗固・冷泉為村・石野広通・佐々木万彦（広通子）・成島和鼎・屋代弘賢・成島司直・畑中盛雄・北村季文・神方古香・（古歌短冊）・岩津資雄

尋山花
山ふかみ心やさきにたづぬらん
まだ見ぬ花の面影にたつ 宗間
身のほどを思ひかへさばあさ衣
あさはかにやはさのみうらみん 連阿

逢樵夫問花
曳とめて問にや帰る柴人の
そでまで匂ふ花の木陰を 宗固
ときゝぬといでにし谷の雪消を
はつねに問とうぐひすやなく 為村

寄花変恋
はなやしる人のこゝろもつれなさの
一夜の程にうつるうらみを 広通
海ふくもけさより春のはつかぜを
まほにかけたる舟のゝどけさ 万彦

海辺早春
をぎのはの音を聞にもしほるらむ
かへらぬ袖の露の夕かぜ 和鼎
ちりぐゝの花の御雪も春雨に
匂ひせかるゝ軒の河浪 弘賢

秋懷旧
しらざりき人の心のあだ桜
あだにうつろふ習ひありとも 司直
めぐみある春の光のくはゝりて
花枝さしそふとことはの松 盛雄

雨中華
やどながらあらまし外は山桜
木の本毎に行て待見む 季文
雪をふかみ霞は薄し不尽の根は
はる猶冬のすがた也ける 古香

山霞猶薄
夜もすがら浦こぐ舟は跡もなし
湖上の月と 月ぞのこれるしがのから崎
いふこゝろを 遠じろきながれのかなた山なへの
それとは見えて大和路に入る 資雄

古香

尋山花

怨恋

逢樵夫問花

寄花変恋

海辺早春

秋懷旧

雨中華

寄花恋

待花

山霞猶薄

湖上の月と

〔宜秋門院丹後〕（新古今和歌集・雜上・一五〇七）

遠じろきながれのかなた山なへの
それとは見えて大和路に入る 資雄

第三部

絵本の楽しみ

絵

本というのは、現代日本語としては児童向けの本のことですが、文化史および書誌学史上の学術用語としては特に江戸期に刊行された墨印や多色摺りの古典籍を指します。絵のみ、もしくは絵を主体とするものを「絵本」、文を主体としてそれに絵が添えられているものを「絵入り本」と言って区別します。文学としては本文の読解が最も重要ですが、伊勢も源氏も徒然草も、絵が入ることによっていっそう多くの読者を獲得してきました。

一八世紀も半ばを過ぎると勝間龍水の絵俳書『海の幸』（宝暦二年〈一七六二〉刊）と『山の幸』（明和二年〈一七六五〉刊）、勝川春章の和歌絵本『錦百人一首あづま織』（安永四年〈一七七五〉刊）、あるいは喜多川歌麿の狂歌絵本『画本虫撰』（天明八年〈一七八八〉刊）など、実にさまざまな、豪華な多色摺り絵本が刊行されました。

松野文庫には、西川祐信および祐信風の絵本を中心に、全部で五〇点以上の絵本が収められています。これは、「西川祐信に嵌った時期があつた」、「一九」九八年には祐信に嵌っていた」（『書影手帖しばしとてこそ』二一三頁・二三三頁）との御自身の言を裏付けるものであり、松野がいかに行成表紙の上方絵本への愛着を有していたかが思量されます。祐信の人物画の特徴は丸みを帯びた柔らかな曲線美にあり、画面全体が上品な趣きを湛えています。その主題は「女性向き教養絵本の色彩が濃い」（『日本古典籍書誌学辞典』「祐信絵本」松平進執筆）とされ、古典の〈大衆化〉に大きな役割を果たしました。後印本の流布や祐信絵本二七点を収める叢書『絵本倭文庫』（寛政二年〈一八〇〇〉刊）刊行をめぐる問題、春本、画題史、そして鈴木春信ら江戸の地の浮世絵師への影響など、浮世絵史上の画業の総合的説明が待たれます。

この第三部では、祐信および祐信風絵本のくさぐさを並べるとともに、中島丹次郎画の『絵本心の種』（享保一二年〈一七二七〉刊）、高木貞武画の『画本和歌浦』（享保一九年〈一七三四〉刊）、長谷川光信画の『絵本鑑歌仙』（宝暦五年〈一七五五〉刊）などの稀書珍本をお目に掛けます。

さあ、皆さんも上方絵本の豊かな世界へ――。

（神作）



3 | 1

絵本心の種

享保期における 絵本流行の一例

大坂の絵師中島丹次郎（生没年未詳）が草木・花鳥を描いた絵本です。中島は小袖雛形本で図案を担当するなど、染織の意匠に精通していました。下巻を欠きますが、序者の称觥堂こと柏原屋清右衛門によって、享保一二年（一七二七）に刊行されたと考えられます（国会蔵本は柏原屋等三肆刊）。柏原屋は渋川版『御伽文庫』をはじめ、近世を通じて活動が続けた大坂書林であり、数多くの絵本を出版しました。なお、天保五年（一八三五）刊『絵本初心道しるべ』は、本書の改題本です。（加藤）



3 — 2

えほんわかのうら 画本和歌浦

たかぎさだたけ 高木貞武の和歌絵本

おおざか
大坂の浮世絵師高木貞武（生没年未詳）による和歌絵本です。「享保九年」刊・宝暦五年（一七五五）印。おおほん
大本三巻三冊。原題簽の角書きは「風流／歌仙」。歌仙の名歌を画題とします。展示箇所は、猿丸太夫「おくやまに／もみぢふみわけ／なく鹿の／こゑ聞ときぞ／秋はかなしき」の歌。声を上げて啼く鹿の番に対して、耳を澄ませる女性（声聞く時ぞ）と顔に手を当てて涙を流す女性（秋はかなしき）が描かれています。（川上）



3 | 3

絵本小倉山

西川祐信（一六七一〜一七五〇）の和歌絵本です。酔墨子（伝未詳）編、寛延二年（一七四九）刊、半紙本三卷三冊。『小倉百人一首』を画題として、巻頭の天智天皇「秋の田の」歌からおよそ四〇首を絵画化しています。序文に子女の学びの助けとすべく編まれた旨があり、各歌には「此ころは」に始まる簡注が添えられています。展示箇所は、壬生忠岑「ありあけのつれなく見えし別より曉ばかりうきものはなし」。もとより平安時代の和歌ですが、描かれる絵は、それぞれ紋付きに二本差し、日本髪に長襦袢と当世風です。（川上）

祐信の百人一首絵本

3-4 絵本富士の錦

珍しい西川左京の上方絵本

行成表紙原装の半紙本で、朱色地の原題箋に「絵本富士の錦 上(下)」と刻された典型的な上方絵本です。「明和頃」刊、京の美濃屋平兵衛版。孤本。松野は、巻上(地口)と巻下(狂歌)で様式趣向を異にしている理由は判然としない、と述べています(『書影手帖』一八八頁)。絵師の西川左京は伝未詳、本書のほかに『絵本つがひ鶴』がありますが(明和書籍目録)、伝本は確認されません。(神作)



3-5 絵本言葉種

これも祐信風の上方絵本

行成表紙原装の半紙本で、原題箋に「絵本言葉種 全」と刻された典型的な上方絵本です。「江戸中期」刊。絵は祐信風で、「福」「玉」「笠」「紋」などの風俗を描きます。八丁オモテまで存。手彩色。孤本。(神作)



3
|
7

絵本鎧歌仙

上方の浮世絵師長谷川光信（生没年未詳）による墨印の武者絵本です。収められた武将は平清盛や木曾義仲、足利尊氏ら三〇人（「歌仙」と謳うからには、欠巻の巻一を入れれば総勢で三六人に及ぶと思しい）、いわば往年の武将のベストアルバムです。「宝暦五年」刊。孤本。縦二一、二糎×横八、一糎の特小本はいかにも可愛らしいですね。（神作）

往年の武将のベストアルバム



3
|
8

絵本花見車

古歌の世界を当世風に描いた和歌絵本

俊恵・山辺赤人・津守国基・西行・源俊賴・藤原定賴・藤原顕輔の名歌の世界を当世風に描いた和歌絵本です。第一丁より第七丁のみ存。半紙本の改装表紙に「絵本花見車」と刻された刷題が貼付されていますが、丁付に「女」と元書名の一部が書き留められています。同書名本を所蔵していた漆山又四郎により著された『絵本年表二』には、「絵本花見車、一卷墨付十四丁、（明和二年）秋／古川鬼玉画、作者光亭、〈板元／売出〉吉文字屋次郎兵衛」とあり、『書籍目録』（明和九年、京・武村新兵衛刊）にも絵本花見車と絵本和歌海の欄に古川鬼玉の名が記されています。しかし、展示書と漆山蔵本が同一本であるかは未詳です。なお、立命館大学に同書名で整理されるものは、序文中に「花見車」とは記されているものの、本書と版面が異なり鈴木春信風の挿絵が描かれ、序文も禿帚子が記しており別本と考えられます。（加藤）



第四部

コレクションの広がり

こ　ここまで、松野の研究の主軸である藤原俊成の周辺と江戸の武家歌壇に関する諸書、そして松野が好んで蒐集した絵本について紹介してきました。しかし松野文庫にはそれ以外にも多種多様な古典籍が収められており、稀覯本も少なからず含まれています。

コレクションの中で目を引くのが朝鮮本です。松野文庫所蔵の漢籍には一九点もの朝鮮本が含まれています。『書影手帖　しばしとてこそ』『玩物喪志記』には韓国の古書肆を訪問して朝鮮版本を手に入れた思い出が綴られており、格別の思い入れがあったものと思量されます。ここでは、唐本(明版)と併せてその一部を御覧に入れます。中国・朝鮮半島・日本の書物の違いなどをお楽しみください。

またコレクションの中核を占める歌書の中にも、見るべきものが多くあります。墨流し表紙が特徴的な入江昌喜写『隆信集』や松浦静山旧蔵の歌合写本二点など、その一部を紹介します。加えて「未詳私撰集」断簡二点は、いずれも完本としては散佚してしまった可能性の高い書物の一部を伝える貴重な資料です。

さらに仏書や地図や画帖のほか、「宇津保物語」断簡・「連歌寄合書」断簡など、今後の研究資料としての活用が期待される書物たちをここに紹介します。

ジャンル、製作地、形態を異にするさまざまな書物が揃いました。古典籍の多様さを御堪能いただき、松野の書物に寄せる〈思い〉を感じ取ってみてください。

(館野)

【コラムD】

松野陽一著 『書影手帖 しばしとてこそ』



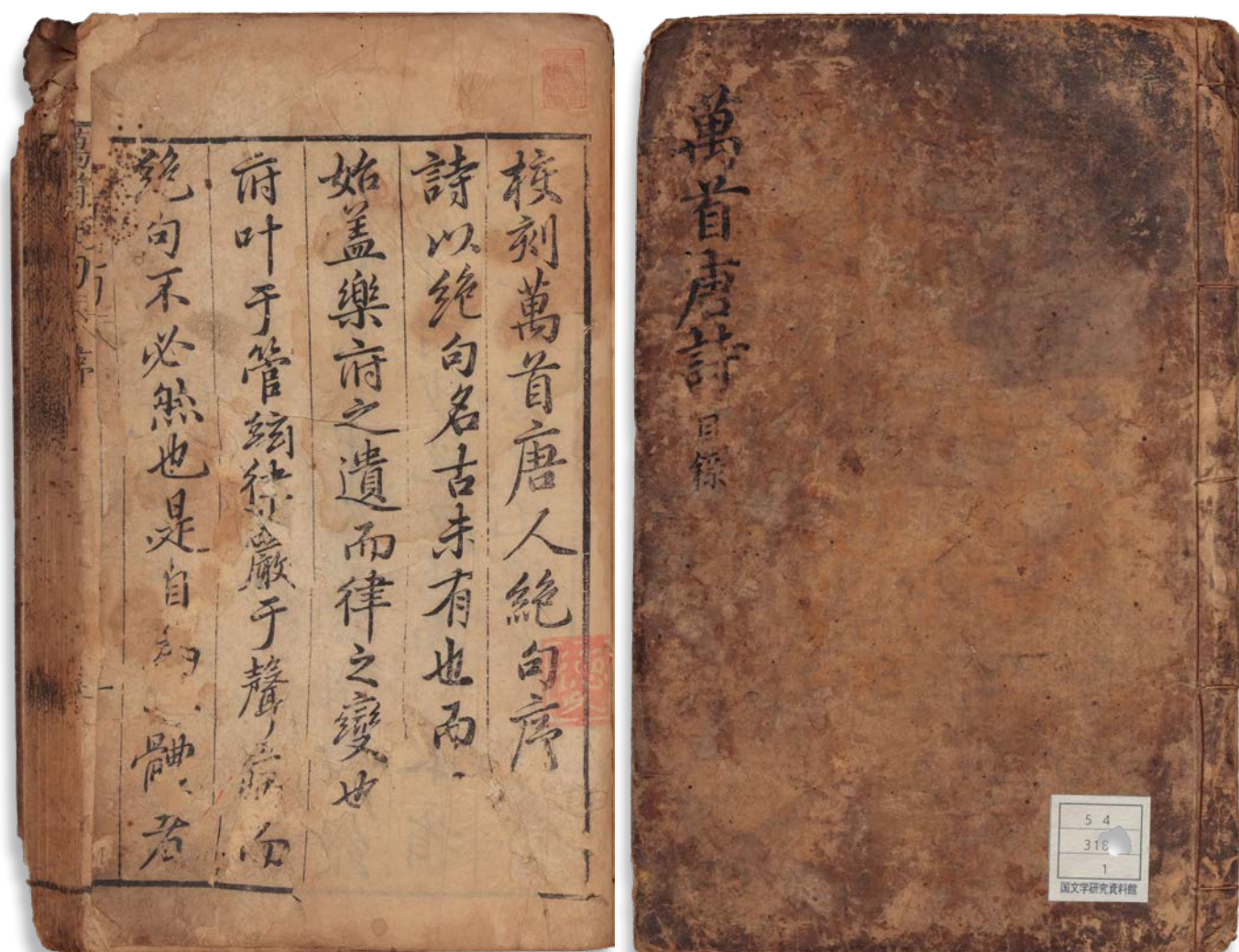
古典籍の流伝と蒐集をめぐる悲喜こもごもを綴った異色の古典籍文化誌には、横山重の名著『書物搜索』上下（角川書店、一九七八）や中野三敏の『本道楽』（講談社、二〇〇三）がありますが、松野の『書影手帖 しばしとてこそ』（笠間書院、二〇〇四）もまた、名随筆集として私たちの記憶に深く刻まれています。

四六判三一〇頁（目次九頁を含む）。二〇〇四年、笠間書院刊。書名は「あとがき」に拠れば、恩師のおひとりと今井卓爾の『〈明治／大正〉詩歌書影手帖』（早稲田大学出版部、一九七九）に因む由。国文学研究資料館長在職時（最終年度）の刊行であり、特にこの二〇〇四年は、わたくしども国文研が大学共同利用機関法人人間文化研究機構の一機関として再スタートを切った年でありました。末尾の「戸越だより」各編には、それに関わるもろもろの感懐が率直に綴られています。

帯には「古典を愛するすべての読者へ」とあり、さらに「古今東西の書物に自在に遊び、知られざる50年代以後の古書籍研究状況を熱く語る、名随筆集」と記されています。構成は全五章。「Ⅰ 和本を尋ねて訪書歴」「Ⅱ 昔の庭 交遊録」「Ⅲ 折々の手帳 随筆」「Ⅳ 玩物喪志記 愛蔵書」「Ⅴ 戸越だより 国文研館長随想」。「初出一覧」「あとがき」。各章の扉に興味に富む図版が掲出されているのも印象的です。

『国書総目録』（岩波書店）がなかった頃の訪書や、恩師・和歌史研究会を軸とした研究仲間のこと、東北大在職時の随想、稀書珍本との出会い、国文研館長在職時のさまざまな所感などなど、研究者松野陽一の日常が垣間見られる珠玉の掌編です。ぜひ御一読を。

（神作）



4
|
1

宋洪魏公進

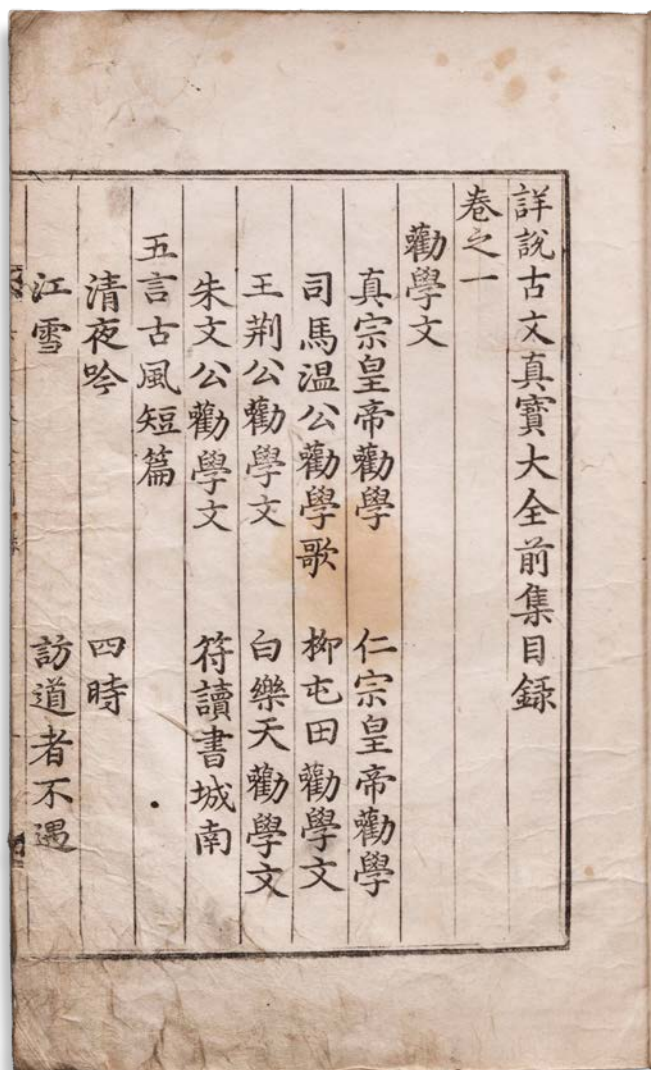
万首唐人絶句

朝鮮に渡った

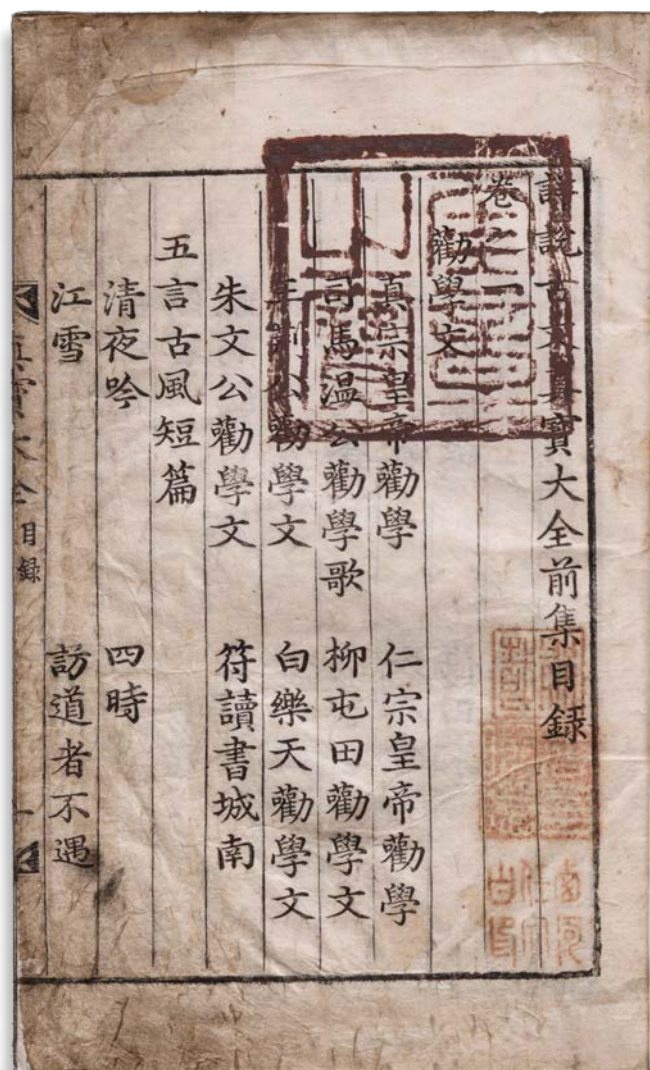
中国明代の刊本

南宋の政治家・学者洪邁（一一一三—一二〇三）が唐代の漢詩のうち絶句のみ集めた詩集を、明代に趙宦光が増補再編したものです。日本にも刊行後すぐ伝わり、国立公文書館（東京都千代田区）には林羅山が元和二年（一六一六）に句点等を書き入れた本があります。松野文庫蔵本は、朝鮮に渡り、そこで表紙を付け替えられたものですが、蔵書印が日本人のもののようにも見えます。松野が入手したのは韓国か、日本か、どちらだったのでしょうか。

（堀川）



4-3



4-2

4
|
3

4
|
2

大全前集

詳説古文真宝

大全前集

詳説古文真宝

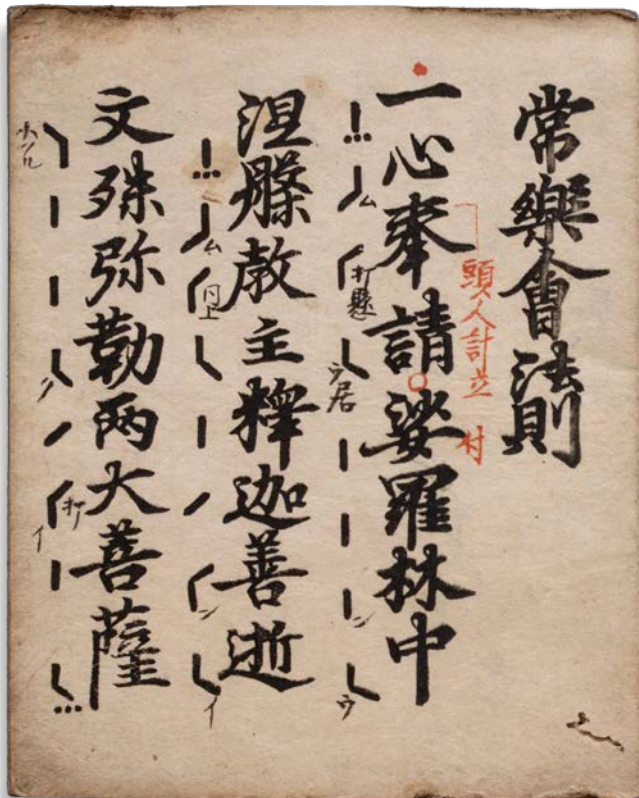
『古文真宝』は中国宋元代に漢詩文入門書として編集されたもので、朝鮮でも日本でも大いに流行しましたが、テキストの系統は異なります。松野文庫蔵本の二点は、同種の金属活字による別時の組版・印刷です。(4-2)の冒頭にある「奎章／之宝」印は、国王から臣下に下賜される内賜本に押捺されるもので、本来なら見返部分に書かれていたはずの下賜の年月や対象者が削除されていますが、蔵書印により一八〇七年の科挙合格者任文白旧蔵と分かります。(堀川)

美しい書体の金属活字
による朝鮮本

4-4 常樂會法則 じょうらくえ ほうそく

高野版（高野山で開版された真言密教関係の典籍）。高野山の常樂会えなんざんしんりゅうしょうみょうばんの南山進流なんざんしんりゅう声明本です。「常樂会」は釈尊が入滅した二月二十五日にその遺徳を偲び感謝を捧げる法要（涅槃会とも）、「南山」は高野山のことです。折本一帖、枳型本。「江戸初期」刊。奥に「文禄二年（一五九三）長月吉日於南山／書之了 泉空」とあり、泉空には同日付の「諸講伽陀集」もあります。高野山の声明として数少ない初期のもので、松野は「講式法則として最初の版本」と記しています（『書影手帖』二二四頁）。

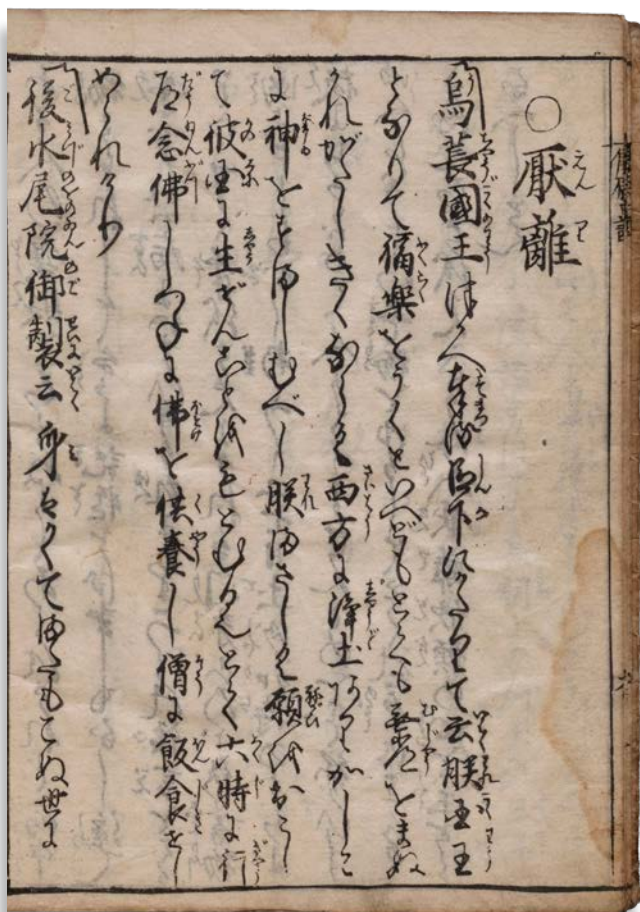
（西山）

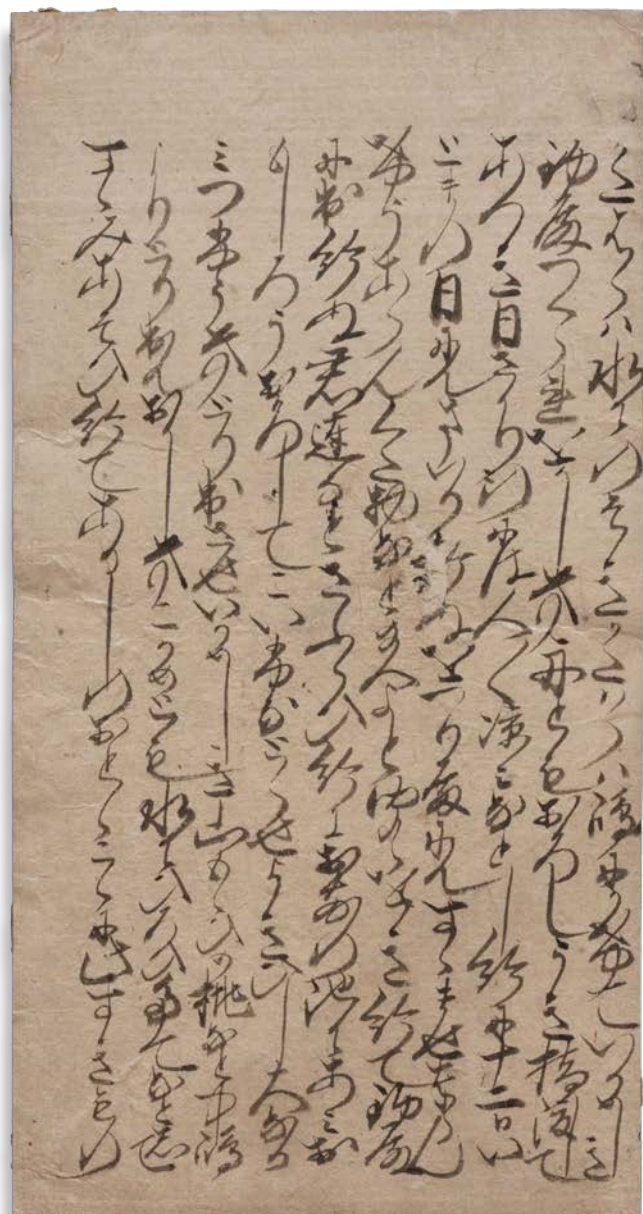


4-6 厭願口譚 えんがんくだん

松野が見出した恵空（一六四三〜九一）の新出本。恵空は『徒然草参考』『節用集大全』ほか多くの著作のある天台宗（元浄土真宗）の学僧で、松野は「大衆性を持った説法僧として評価すべき存在」と記しています（『書影手帖』一八三頁）。皎空校。本書は一六丁めまでで末尾を欠きますが、西山蔵本の刊記により、恵空が開いた洛東正立寺の光明真言講の信仰者による刊行と判明、江戸期に流行した仮名法語を考える上で貴重な一冊です。

（西山）





現存最古の

『宇津保物語』断簡

『宇津保物語』は、平安中期に成立した長編作り物語です。二〇巻。紫式部の『源氏物語』に多大なる影響を与えました。『宇津保物語』は伝本に恵まれず、現存する写本はすべて江戸時代以降のもですが、本品は、断簡ながら室町末期の書写と推定されて貴重です（古筆了榮の極札に拠れば連歌師紹巴の筆といえます）。断簡は「祭の使」巻、左大將源正頼が新造した釣殿で涼みながら和歌を詠む場面です。

（高橋）

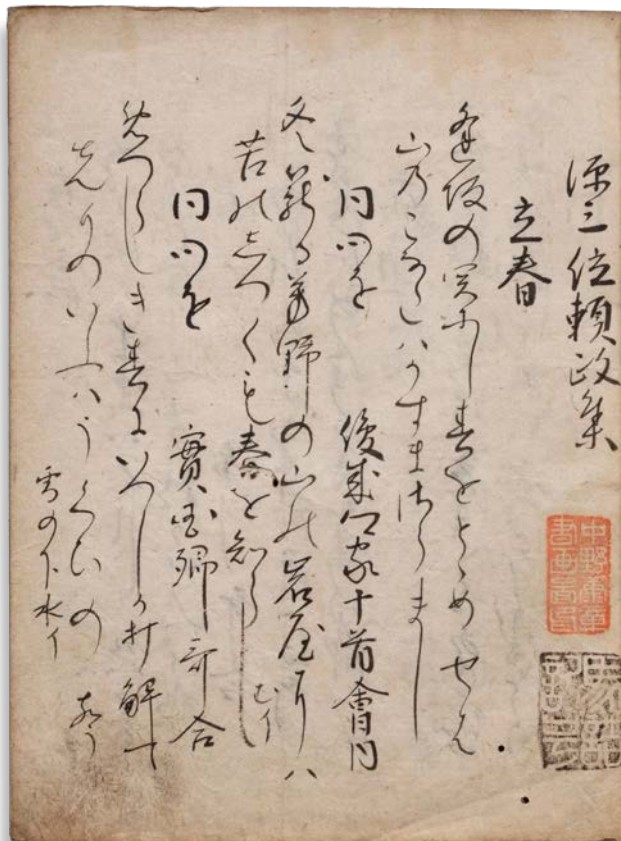
4
ー
7

〔宇津保物語〕断簡

4-9 源三位頼政集

上代様の上本です

平安後期の武将 源 頼政（二〇四〜八〇）の家集です。自撰。四季・賀・別・旅・哀傷に部類（恋・雑を欠く）。奥書なし。上代様の、それも江戸初期の写しと推定される上本で、今後の精査が待たれます。紺地裂表紙（改装）に金の見返し。大きさは縦一八・九×二五・二センチですが、書型は枡型に近く感じられます。中野康章（二八七四〜一九四七）旧蔵。（小野寺・神作）



4-10 「平忠度朝臣家集」

お気に入りの江戸版（絵入り）の小本

平安末期の武将 平 忠度（二四四〜八四）の家集です。忠度は、『平家物語』『忠度都落』に俊成との印象深いエピソードが綴られています。多くの伝本があり、それらの大半は写本ですが、本書は元禄九年（二六九六年）刊本、それも鱗形屋の江戸版で師宣風の絵入り。存巻下。江戸版（絵入り）の小本は松野のお気に入りでした。（小野寺・神作）

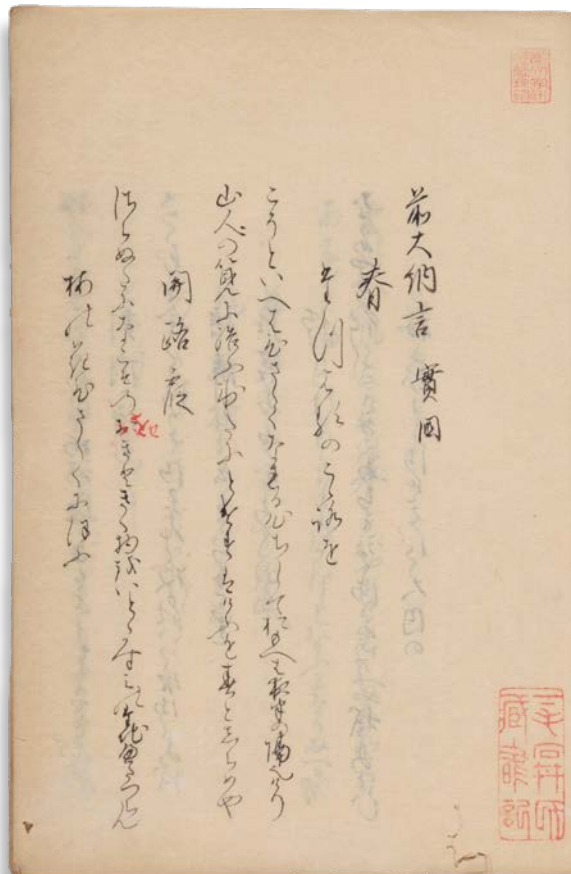


4 11 前大納言実国卿集

平安末期の歌人藤原実国（一一四〇〜八三）の家集です（「実国集」とも）。実国は、『千載和歌集』以下の勅撰集に一三首入集する勅撰歌人。本書は、六〇首を収載する甲本系統の一本です。瓢箪型の朱印「鳳鳥館」により、江戸中後期の神官・歌人賀茂季鷹の旧蔵と知られます。書中にまま見出される仮名遣いに関する訂正も、季鷹による可能性があります。

（柿沼・神作）

賀茂季鷹旧蔵の私家集



4 12 隆信集

昌喜好みの墨流し表紙

院政期の歌人藤原隆信（一二四二〜二〇五）の家集です。隆信の家集には二種（いずれも自撰）があり、一つは賀茂重保の求めに応じて編まれた「寿永本」、もう一つは最晩年の撰にかかる「元久本」で、本書は後者です。遊紙に「入江昌喜筆隆信集 墨付百十二葉」と書かれた貼紙があり、江戸中期の大坂の和学者入江昌喜（一七二二〜一八〇〇）筆と知られます。昌喜好みの墨流し表紙が目惹きます。

（柿沼・神作）



4
|
13

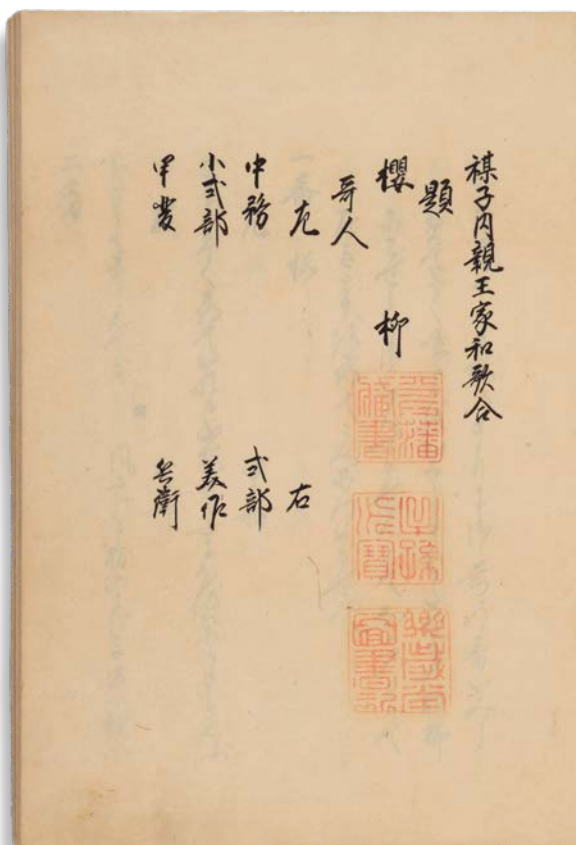
〔ばいしないのうけ 禰子内親王家

うたあわせ 歌合等歌合七種〕

松浦静山旧蔵の歌合写本

禰子内親王（一〇三九〜九六）は、後朱雀天皇の皇女。祖父の藤原頼通、その養子で家司の源師房の後見で、二〇回以上の歌合を主催しました。本書に収められるのは、その数ある歌合のうちの六つ。最後の「日吉社歌合」は、鎌倉時代の歌人藤原知家（一二八二〜一二五八）の自歌合です。肥前平戸藩主、松浦静山（一七六〇〜一八四二）旧蔵。

（柿沼）



4
|
14

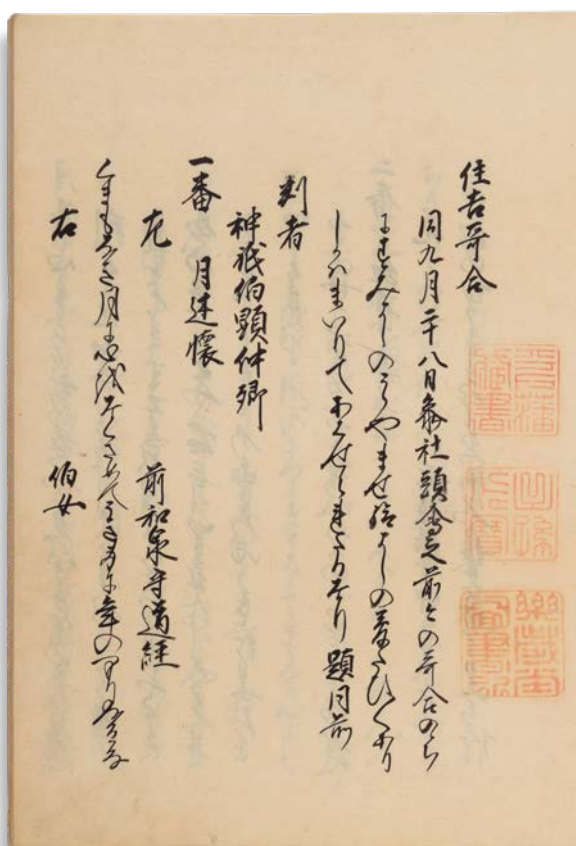
〔すみよししやうたあわせ 住吉社歌合等

歌合四種〕

異なる時期の歌合を集めた写本

本書も松浦静山旧蔵。「住吉歌合」（大治三年（一二二八）、「撰津守有綱家歌合」（承保二年（一〇七五）、「なぞなぞ調合」（平安前期催）、「西国受領歌合」（平安後期催）の四種所収。

（柿沼）

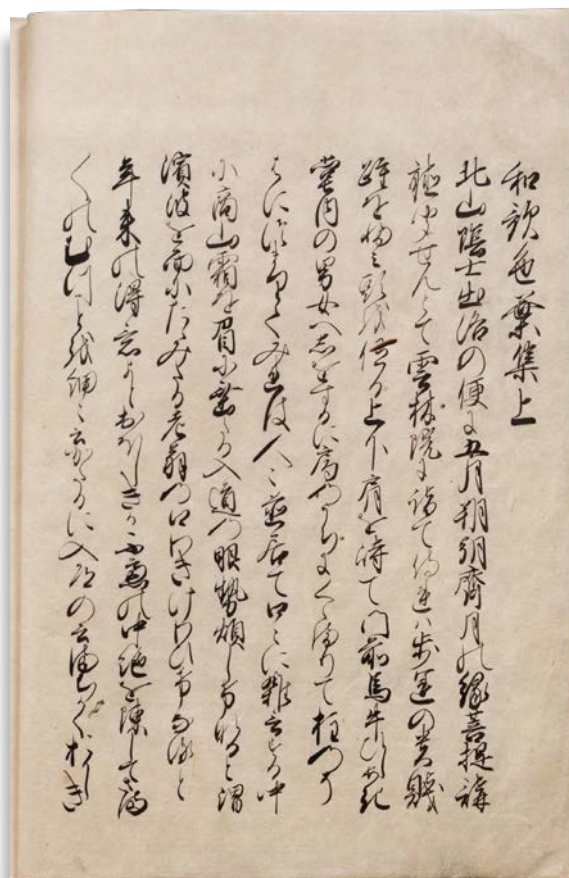


4 15 和歌色葉集

仁和寺周辺に住み、六条藤家の顕昭とも交流があった上覚（二二四七〜二二二六）という僧侶によって記された歌学書です。建久九年（一一九八）の成立で、後鳥羽院に献上されました。本書は、上覚が手元に留めおいた本の系統の伝本と考えられます。

（館野）

後鳥羽院時代の歌論歌学書

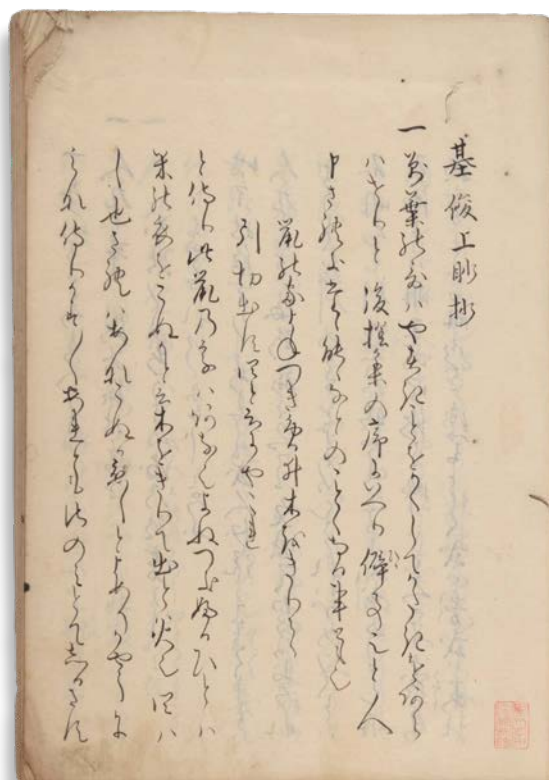


4 16 基俊上抄抄

著名歌人の権威を借りる仮託の書

俊成の歌道の師として知られる藤原基俊作の歌学書を謳っていますが、実は鎌倉後期頃に成立した仮託の偽書です。同じ基俊偽書として著名な『悦目抄』の諸本展開の中で生まれたテキストで、内容は『和歌無底抄』の巻八〜一〇に収められる秘説の本文とほぼ同じものです。

（館野）



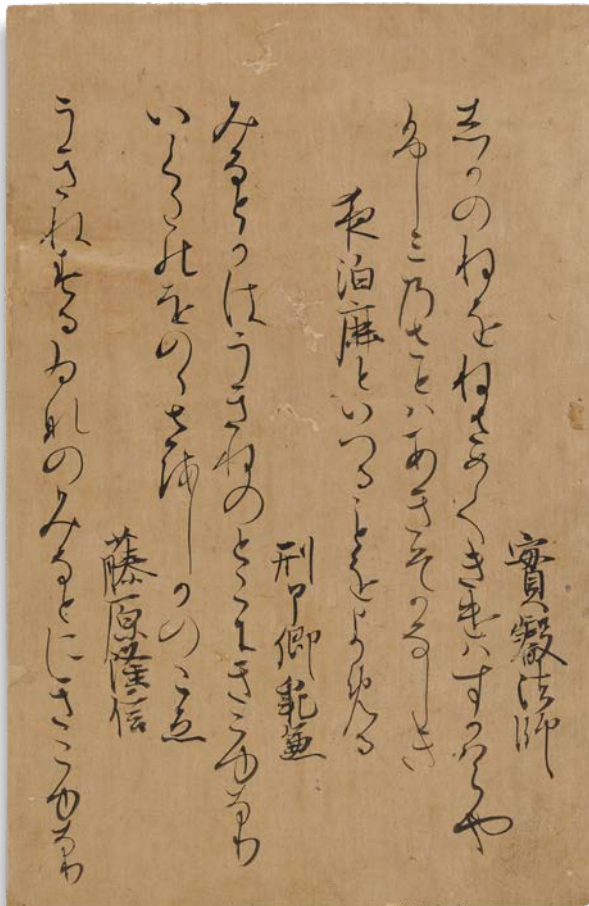
4
18

〔未詳私撰集〕断簡

正体不明の私撰集断簡二種

本品は、私撰集の断簡とされますが詳細は不明です。その秋歌三首は以下の通り。実叡法師詠「しかのねをねさめくきけはすかはらやふしみのさとあきそかなしき」、藤原範兼詠「みるとかはうきねのここにきこゆなりいくたのをのさをしかのこゑ」、藤原隆信詠「うきねするゐなのみなとにきこゆなり」〔下句欠〕。後二首は『千載和歌集』に入集します。古筆了信の極札には、かの寂蓮（二三九?〜二〇二）の書写にかかること記されています。

（高橋）

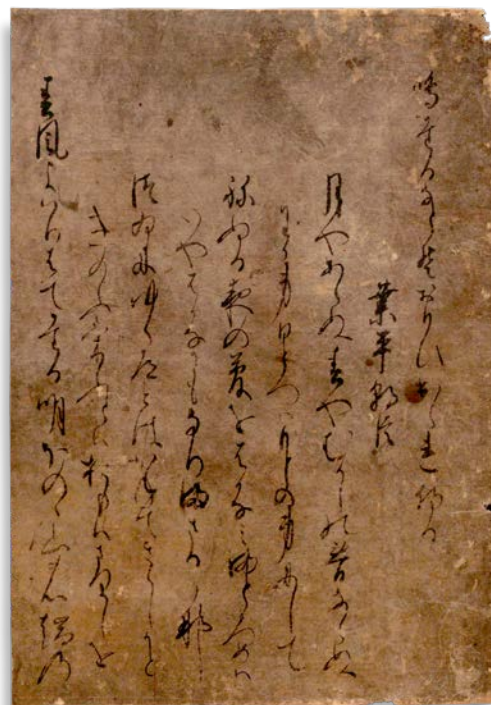


4
19

〔未詳私撰集〕断簡

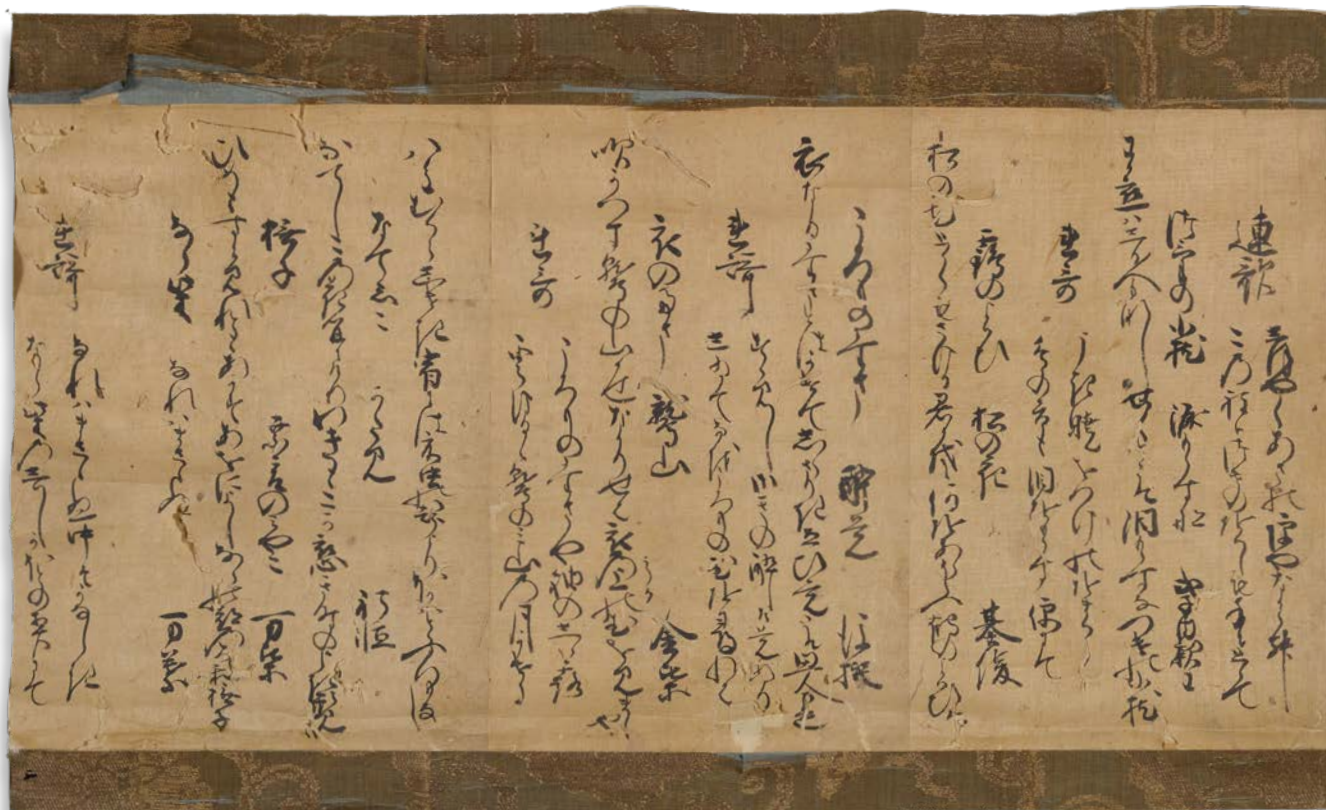
本品も私撰集の断簡とされますが詳細不明。在原業平作の三首を載せています。「月やあらぬ春やむかしの春ならぬわか身ひとつはもとの身にして」「ねぬる夜の夢をかなみまところめはいやはかなにもなりまさるかな」「つゐにゆく道とはかねてきゝしかときのふけふとはおもはさりしを」。

（高橋）



4
18 全体図（二幅）





全体図（二幅）

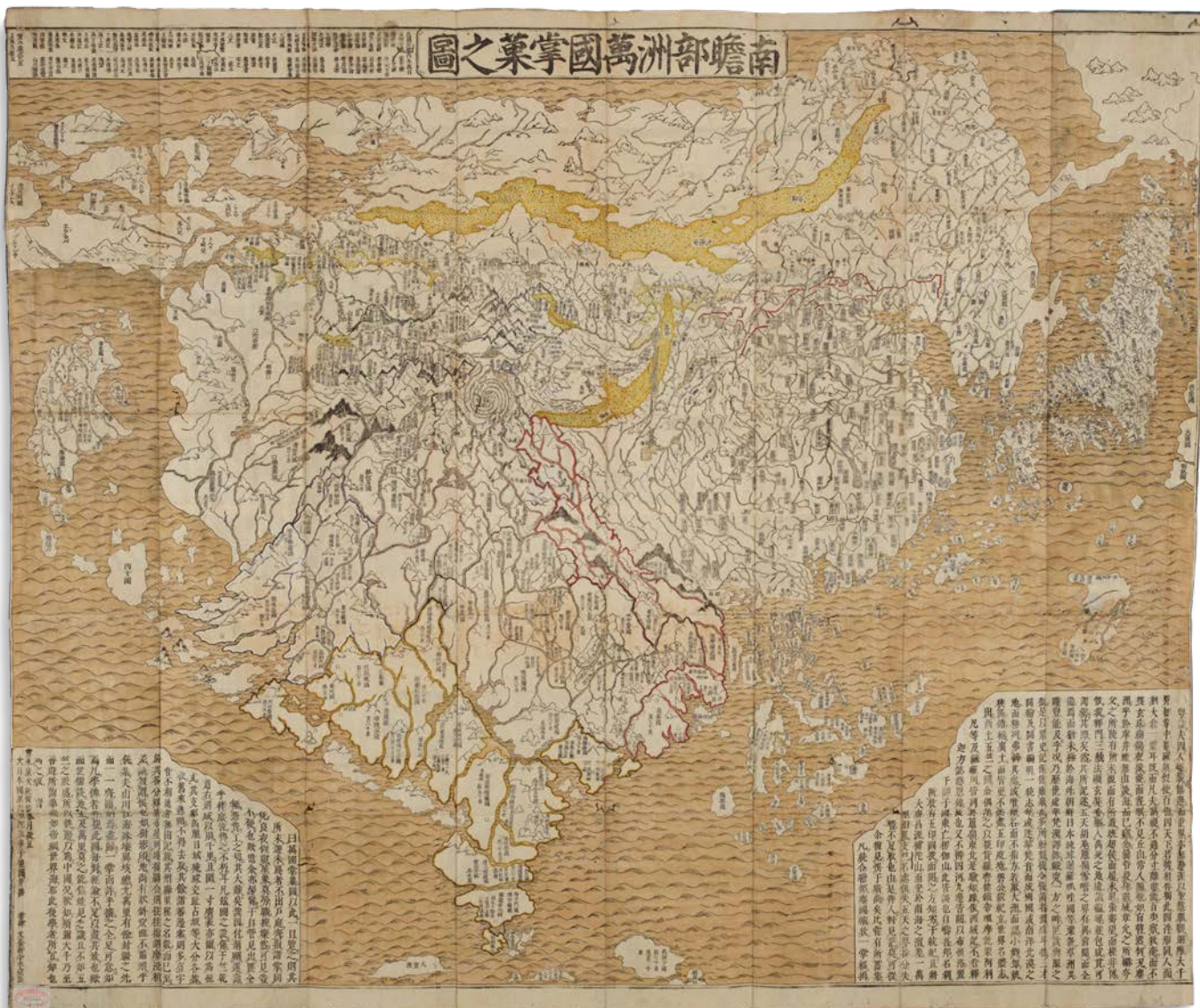


幻の『連証集』か？

連歌では前句の言葉と縁のある言葉を用いて句を付けるので、その結びつき（寄合）を参照できる連歌寄合書が数多く編まれました。これもイロハ順に語を掲げた、未知の連歌寄合書の断簡で、接続しない三紙を軸装しています。一例を示すと「ころものたまに「酔覚」が寄合、「衣なるたまとはかけてしらざりきゑひ覚こそうれしかりけれ」（後拾遺集の赤染衛門の歌。「後撰」は誤り）が本歌、「すゞみし御きの酔は覚ぬる／しゐてなをころもの玉を尋れば」が実際の例句です。この箇所、最古の連歌寄合書である鎌倉末期成立の『連証集』と一致、他の箇所も同書に近いようです。『連証集』は孤本でかつ残欠本なので、重大な価値を持つ資料です。

（小川）

4 | 20 「連歌寄合書」断簡



4
|
21

南瞻部洲 万国掌菓之図

異色の世界地図

仏教的な世界観に基づく世界地図
 です。日本で最初に刊行された南瞻
 部洲図として流布しました。唐・天
 竺・日本のほか、ヨーロッパや南北
 アメリカ大陸もぼんやりと確認でき
 ます。浪花子〔鳳潭〕製図并撰。宝
 永七年（一七二〇）刊。縦二九、四
 センチ
 横一四二、九センチ。松野は「自然
 地理学からは最も遠く、「人間の想
 像力の恣意性が面白く」て「見入っ
 ていることが多い」（『書影手帖』）と述べていま
 す。
 （神作）



4 | 22

雛本古筆絵鑑

おりほん
折本に仕立てられた画墨の手鑑
のミニチュアで、雲母摺りの台紙に
江戸中期頃刊行の墨印の画書（縮小
して摺刷）を貼ったもの。書名は外
題（原題簽）に拠ります。貼り紙の
地色には色替わり料紙が用られてお
り、瀟洒なたたずまいが好もしく感
じられます。松野は「高度な趣味人」
向けのもの（『書影手帖』しばしとてこ
そ『一八〇頁』）と推察しています。栄
懐子（伝未詳）序。縦一一、三厘×
横八、一厘の特小本。伝本は極稀で
す。（神作）

可愛い画墨手鑑の
ミニチュア

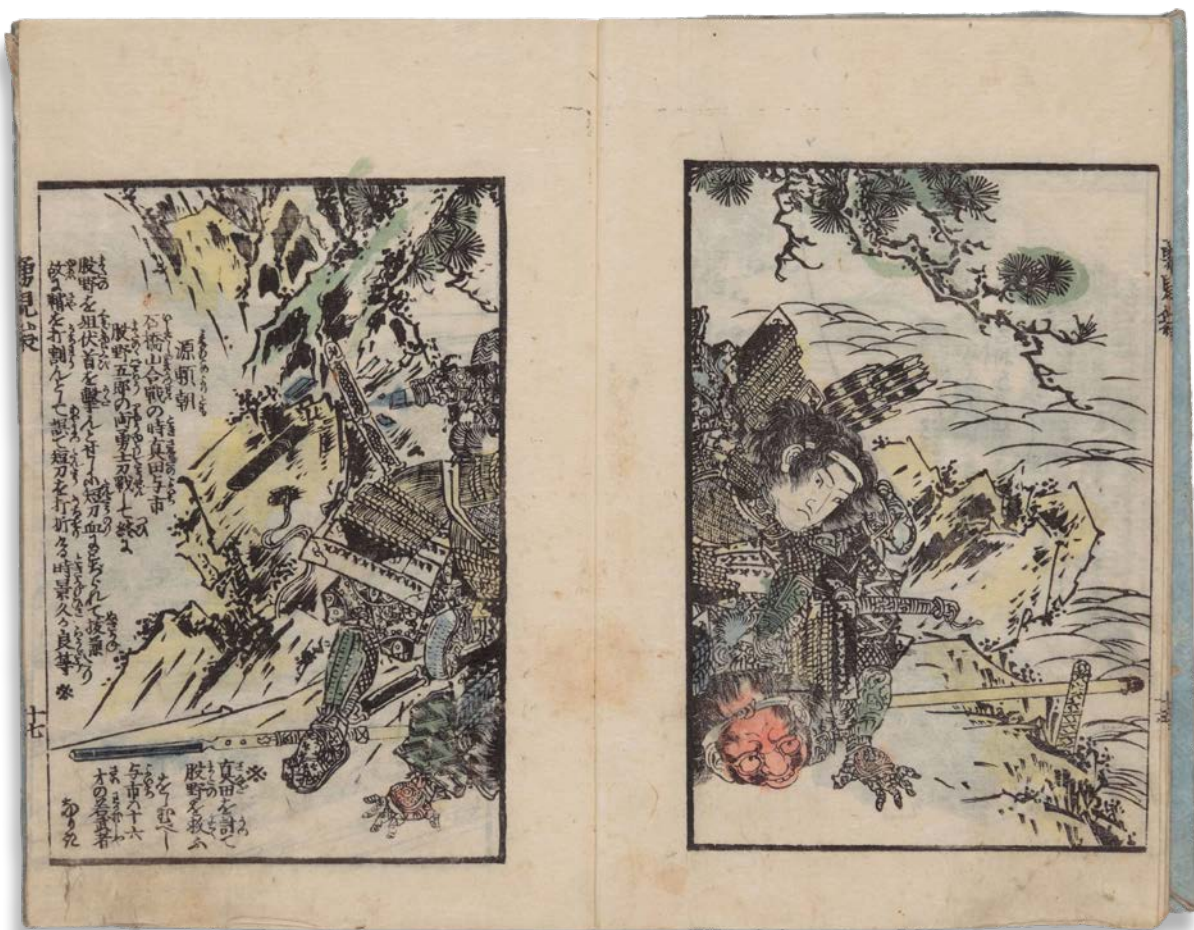


4 | 23 清談嶺の初花

江戸の都市風俗と 恋愛を描く

一九世紀初頭頃より写本で流通していた「江戸紫」なる作品を十返舎一九が版本化した作品。主人公捨五郎の誠実な人柄と養子という立場上の遍歴、さらにお薫との情愛などが小事件を連ねながら展開します。人情本という小説ジャンルのごく初期に位置づけられ、お家の繁栄を迎える結末ならびに主人公の艶福家ぶりはこのジャンルに必須の要素でした。後編の見返しには「どうぞこの本にかいてある捨五郎のよふなうまき事をしてみたいものだ。あらうらやましや（以下略）」との落書きがあります。人情本は中本が本来の定型サイズでしたが、松野文庫蔵本はひとまわり大きな半紙本書型です。

（木越）



4 | 24 絵本勇見袋

和漢にわたる武者絵を溪斎英泉が描いた絵本。具体的には、曾我兄弟・趙雲・日本武尊・源為朝・豫譲・木曾義仲と巴御前・関羽・俵藤太・平忠盛・楠正成・源頼朝・坂田金時など、いずれも著名な故事や挿話に基づく場面が選ばれています。墨印の絵に着色したのは読者の所為でしょう。合巻は中本が定型ですが、松野文庫蔵本はやや大ぶりの半紙本です。〔文政二年〕（一八二八）刊。溪斎英泉の絵本目録（和泉屋市兵衛）が付されています。（木越）

『八犬伝』の挿絵も
手がけた絵師による
武者絵本

出品リスト

No.	書名	書写／刊行年次	書型冊数	備考	請求 番号
第一部 藤原俊成とその周辺					
111	〔八代集〕	〔江戸前期〕写	大一四帖		16199
112	古今和歌集	〔江戸前期〕写	大一帖		16112
113	金葉和歌集	〔江戸前期〕写 (伝松崎俊章)	大一帖		16851
114	千載和歌集	〔江戸前期〕写 (伝松崎俊章)	大二帖		16852
115	千載和歌集	〔室町中期〕写 (伝蜷川親元)	大一帖 (存巻下)		16119
116	千載和歌集	〔室町後期〕写 (伝曼殊院慈運)	半二冊		16196
117	千載和歌集	〔江戸前期〕写	大二帖	*西本願寺旧蔵	16187
118	千載和歌集	〔室町前期〕写	半三冊	*大島雅太郎旧蔵	16124
119	千載和歌集	〔江戸前期〕写 (存巻下)	大一帖		16117
110	千載和歌集	〔寛文・延宝頃〕写	大二帖	*小汀利得旧蔵	16125
111	千載和歌集	文政七年刊	特小一冊	*柘植版	1614
112	〔千載和歌集かるた〕	〔江戸中期〕写	一組		16106
113	長秋詠藻	〔江戸前期〕写	大二冊	*松浦静山旧蔵	16132
114	俊成九十賀之歌	寛文二年写 (岡田善政)	小一帖	*吉田薫寄贈	16120
115	古来風林抄	〔江戸前期〕写	大二冊	*内藤風虎・ 加藤機足旧蔵	16154
116	古来風林抄	元禄三年刊	半五冊	*金子彦二郎旧蔵	16153
117	別雷社〔歌合〕	〔江戸前期〕写	半一帖	*反町弘文荘	16150
118	別雷社歌合	〔江戸中期〕写	大一冊	*井上通泰旧蔵	16149

No.	書名	書写／刊行年次	書型冊数	備考	請求 番号
119	御裳濯河歌合ほか	〔江戸後期〕写	大一冊	*二条家旧蔵	54127
120	続後撰和歌集	〔江戸中期〕写	桝二帖		16100
121	〔歌苑抄〕断簡	〔鎌倉前期〕写 (伝西行)	一幅		16193
122	小町花あはせ	〔元禄九年〕刊	小一冊		54178
第二部 江戸の武家歌壇					
211	再治視聴筆削	安政六年写	半二冊		16164
212	和歌童翫抄	〔江戸後期〕写	半一冊		16158
213	和歌童翫抄	宝暦四年刊	半一冊		16162
(参考1)	招嘲集(亨弁和歌集)	〔江戸中期〕写	半一冊		石野52145
214	鶏鳴霞関集	〔江戸後期〕写	大二冊		16139
215	霞関集	〔江戸後期〕写	大一冊		16138
216	延年観再点連歌	明和七年写 (自筆)	横一冊	*久保田米・弥富破摩 雄旧蔵、反町弘文荘	16137
217	絵空言	〔江戸後期〕写	大一冊		16171
(参考2)	冷泉為村卿詠作類聚	〔江戸中期〕写 (石野広通)	存半一七冊		石野52166
(参考3)	上下紀行	享保六年写(自筆)	横一帖		ナ5141
(参考4)	夏野の草	〔江戸後期〕写 (成島司直)	半一冊	*成島司直旧蔵	石野52195
218	堀川後度百首三吟	〔文化頃〕写 (松平定信)	大一冊	*反町弘文荘	16146
219	水月詠藻	〔文化末年頃〕写	大一冊	*仙台藩伊達家旧蔵	16144
2110	賢歌愚評	〔江戸後期〕写	大一冊		16157


No.	書名	書写／刊行年次	書型冊数	備考	請求 番号
211	行之記	〔江戸後期〕写	大一冊		16167
212	〔江都〕諏訪台八景詩歌	享保一三年序刊	大一冊		16110
213	飛鳥山十二景詩歌并碑	安政五年刊	半一冊		54263
(参考5)	飛鳥山十二景和歌	元文六年刊	大一冊	*仙台藩伊達家旧蔵	ナ2299
214	和歌渚の松	寛延元年刊	大合一冊	*狩野亨吉・三宅清旧蔵	16143
215	〔近世歌人和歌短冊〕	〔江戸〕昭和写	六七枚		54362
(参考6)	芝君和歌集	文化一〇年写 (光琳寺華巖)	半二冊		石野52157
第三部 絵本の楽しみ					
311	絵本心の種	〔享保二年〕刊	大二冊	*中島丹次郎画	54220
312	画本和歌浦	〔享保九年〕刊・宝暦五年印	大三冊	*高木貞武画	54173
313	絵本小倉山	寛延二年刊	半合一冊 (欠巻中)	*西川祐信画	54176
314	絵本富士の錦	〔明和頃〕刊	半二冊	*〔西川左京〕画	16168
315	絵本言葉種	〔江戸中期〕刊	半一冊 (八丁表マデ存)	*祐信風	16170
316	絵本羽形船	〔江戸中期〕刊	半一冊 (三丁半ノミ存)	*祐信風	16169
317	絵本鎧歌仙	〔宝暦五年〕刊	特小五冊 (存巻二一六)	*長谷川光信画	16109
318	絵本花見車	〔明和二年〕刊	半一冊 (七丁表マデ存)	*祐信風	54213
第四部 コレクションの広がり					
411	宋洪魏公進万首唐人絶句	〔明末〕刊	大五冊		54318
412	詳説古文真宝大全前集	〔朝鮮李朝〕刊	特大二冊	*活字版	16181
413	詳説古文真宝大全前集	〔朝鮮李朝〕刊	特大一冊	*活字版	16180
414	常楽会法則	〔江戸初期〕刊	枳一帖	*高野版	16103

No.	書名	書写／刊行年次	書型冊数	備考	請求 番号
415	念仏歌仙集	貞享二年跋刊	大一冊		5418
416	厭願口譚	〔江戸中期〕刊	半一冊		16174
417	〔宇津保物語〕断簡	〔室町末期〕写 (伝紹巴)	一枚		161182
418	〔源氏物語〕花宴巻	〔江戸初期〕刊	大一冊	*伝嵯峨本、浜口博章旧蔵	16107
419	源三位頼政集	〔江戸初期〕写	枳一冊	*中野康章旧蔵	16130
4110	〔平忠度朝臣家集〕	元禄九年刊	小一冊	*江戸版	16131
4111	前大納言実国卿集	〔江戸後期〕写	大一冊	*賀茂季鷹旧蔵	54127
4112	隆信集	〔江戸中期〕写 (入江昌喜)	大一冊		16102
4113	〔裸子内親王家歌合等歌合七種〕	〔江戸前期〕写	大一冊	*松浦静山旧蔵	54134
4114	〔住吉社歌合等歌合四種〕	〔江戸前期〕写	大一冊	*松浦静山旧蔵	54135
4115	和歌色葉集	〔江戸前期〕写	大三冊		16155
4116	基俊上抄抄	〔江戸中期〕写	大一冊		54105
4117	和歌用心私説	〔江戸中期〕写	大一冊	*秋末一郎旧蔵	16108
4118	〔未詳私撰集〕断簡	〔鎌倉中期〕写 (伝寂蓮)	一幅		16192
4119	〔未詳私撰集〕断簡	〔室町前期〕写	一枚		161181
4120	〔連歌寄合書〕断簡	〔室町後期〕写	一幅	*小川剛生寄贈	16121
4121	南瞻部洲万国掌菓之図	宝永七年刊	一舗		54272
4122	雛本古筆絵鑑	〔江戸中期〕作	特小一帖		16112
4123	清談嶺の初花	初編 文政二年刊、後編 〔文政四年〕刊	半五冊		54231
4124	絵本勇見袋	〔文政二年〕刊	半二冊		54174

国文学研究資料館

2024 年度展示

松野文庫の贈りもの

主催 人間文化研究機構 国文学研究資料館
後援 立川市・多摩信用金庫・立川商工会議所・
立飛ホールディングス
発行日 2024 年 9 月 5 日
発行 人間文化研究機構  国文学研究資料館
編集 たてのふみあき かわかみ はじめ かんさくけんいち ふくざわてつどう
館野文昭・川上 一・神作研一・福澤徹三・
かわたしろうこ
河田 翔子
制作 前田印刷株式会社